

宮崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅰ

# 箱崎 14

—箱崎遺跡第20次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第767集

2003

福岡市教育委員会

宮崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅰ

HAKO

ZAKI

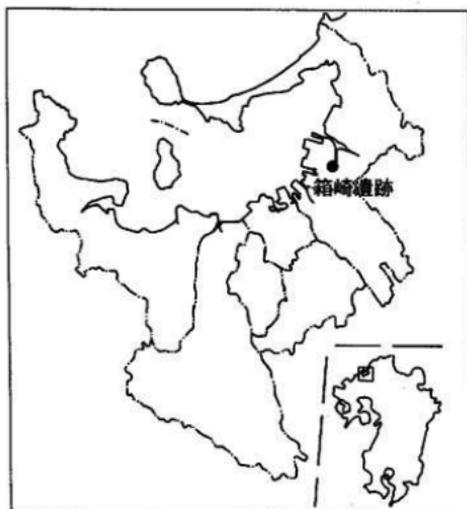
箱

崎

14

— 箱崎遺跡第20次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第767集



遺跡略号 調査番号  
HKZ-20 9959

2003

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていくこともまた事実であり、本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書は宮崎土地区画整理事業に伴い調査を実施した箱崎遺跡第20次調査の成果を報告するものです。今回の調査では、古墳時代や中世の集落跡を確認すると共に、多数の生活用具や交易品が出土しました。これらは当時の箱崎地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、費用負担など多くのご協力を賜りました福岡市土木局をはじめとする関係者の方々に對し、心から謝意を表します。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 生田 征生

## 例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が宮崎土地区画整理事業に伴い、東区箱崎1丁目地内において発掘調査を実施した箱崎遺跡第20次調査の報告書である。
2. 本書で報告する調査の細目は以下のとおりである。

調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間
9959	HKZ-20	882m <sup>2</sup>	1999.12.13~2000.3.31

3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は榎本義嗣、稲田健二・上田龍児（福岡大学文学部学生）、井本俊亮・花鳥拓・山口耕平（別府大学学生）、渡邊誠（九州大学文学部学生）が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は上田、渡邊、榎本が行った。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は榎本が行った。
6. 本書に掲載した空中写真の撮影は写測エンジニアリング株式会社が行った。
7. 本書に掲載した遺物写真の撮影は平川敬治が行った。
8. 本書に掲載した挿図の製図は上田、榎本が行った。
9. 本書で用いた方位は座標北で、真北より0°19'西偏する。
10. 本書に記載した座標は国土調査法第Ⅱ座標系に拠っている。
11. 遺構の呼称は竪穴住居をSC、井戸をSE、土坑をSK、溝をSD、埋葬遺構をSX、ピットをSPと略号化した。
12. 本書で記述する輸入磁器の分類、説明については以下の文献を参考とした。  
横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」  
【九州歴史資料館研究論集 4】1978年  
大宰府市教育委員会 「付編・土器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』1983年
13. 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
14. 本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
15. 本書の執筆および編集は榎本が行った。

# 本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	6
1. 調査の概要	6
2. 1区の調査	7
1) 概要	7
2) 遺構と遺物	9
(1) 竪穴住居 (SC)	9
(2) 井戸 (SE)	9
(3) 土坑 (SK)	14
(4) 溝 (SD)	16
(5) 埋葬遺構 (SX)	16
(6) その他の遺物	17
3. 2区の調査	18
1) 概要	18
2) 遺構と遺物	19
(1) 竪穴住居 (SC)	19
(2) 井戸 (SE)	22
(3) 土坑 (SK)	29
(4) その他の遺物	37
4. 3区の調査	38
1) 概要	38
2) 遺構と遺物	38
(1) 井戸 (SE)	38
(2) 土坑 (SK)	42
(3) 溝 (SD)	44
(4) その他の遺物	44
IV. 結語	46

## 挿図目次

第1図	箱崎遺跡位置図 (1/25,000).....	3
第2図	箱崎遺跡調査区位置図 (1/5,000).....	5
第3図	宮崎上地区函藝理事業地内調査区位置図 (1/3,000).....	(折り込み)
第4図	1区調査区位置図 (1/1,000).....	7
第5図	1区西吹上層実測図 (1/50).....	8
第6図	SC025実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3).....	10
第7図	SE022実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3).....	11
第8図	SE023実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3).....	12
第9図	SE024実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3).....	13
第10図	SK017-021出土遺物実測図 (1/3).....	14
第11図	SK009-010-017-018-021実測図 (1/40).....	15
第12図	SD005-006実測図 (1/40、1/80) および出土遺物実測図 (1/2、1/3).....	16
第13図	SX020実測図 (1/30).....	17
第14図	ピット・遺構検出時出土遺物実測図 (1/1、1/2、1/3).....	17
第15図	2区調査区位置図 (1/1,000).....	18
第16図	2区北壁土層実測図 (1/50).....	19
第17図	SC133実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/1、1/3).....	20
第18図	SC140実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/2、1/3、1/4).....	21
第19図	SE126-129実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3).....	22
第20図	SE128実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3).....	23
第21図	SE131実測図 (1/40).....	24
第22図	SE131出土遺物実測図 (1/3、1/4).....	25
第23図	SE138実測図 (1/40).....	26
第24図	SE138出土遺物実測図 (1/3、1/4).....	27
第25図	SE139実測図 (1/40).....	28
第26図	SE139出土遺物実測図 (1/2、1/3).....	29
第27図	SK121-122-123-124実測図 (1/40).....	30
第28図	SK121-122-123出土遺物実測図 (1/3、1/4).....	31
第29図	SK125-130-132-134-135-136実測図 (1/40).....	32
第30図	SK125-132-134-136出土遺物実測図 (1/3).....	33
第31図	SK137-151-153-185-228実測図 (1/40).....	34
第32図	SK137-151-153-185-228出土遺物実測図 (1/3、1/4).....	35
第33図	ピット・遺構検出時出土遺物実測図 (1/3).....	36
第34図	3区調査区位置図 (1/1,000).....	38
第35図	SE424実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3).....	39
第36図	SE426実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/1、1/3).....	40
第37図	SE428実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/2、1/3).....	41
第38図	SE429実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3).....	42

第39図	SK421・422・423・425・518・599実測図 (1/40) .....	43
第40図	SK421・422・518・599出土遺物実測図 (1/3) .....	44
第41図	SD427・550実測図 (1/40、1/60) .....	44
第42図	ピット・遺構検出時出土遺物実測図 (1/1、1/2、1/3、1/4) .....	45

## 表 目 次

第1表	箱崎遺跡調査・覧表 .....	4
第2表	箱崎上地区面整理事業地内調査・覧表 .....	6

## 付 図

箱崎遺跡第20次調査1区・2区・3区全体図 (1/150)

## 図版目次

- |      |                       |                      |
|------|-----------------------|----------------------|
| 図版 1 | (1) 1区全景 (上空から)       | (2) 2区全景 (上空から)      |
| 図版 2 | (1) 3区全景 (上空から)       |                      |
| 図版 3 | (1) 1区 SC025 (東から)    | (2) 1区 SE022 (東から)   |
|      | (3) 1区 SE022井筒 (東から)  | (4) 1区 SE023 (西から)   |
|      | (5) 1区 SE023井筒 (西から)  | (6) 1区 SE024 (西から)   |
| 図版 4 | (1) 1区 SK017 (南から)    | (2) 1区 SK018 (東から)   |
|      | (3) 1区 SK021 (東から)    | (4) 1区 SX020 (南から)   |
|      | (5) 1区 SX020 (西から)    | (6) 1区 SX020 (西から)   |
| 図版 5 | (1) 2区 SC133 (北から)    | (2) 2区 SC140 (西から)   |
|      | (3) 2区 SE131 (西から)    | (4) 2区 SE131井筒 (北から) |
|      | (5) 2区 SE138 (西から)    | (6) 2区 SE139 (南から)   |
| 図版 6 | (1) 2区 SE139井筒 (北西から) | (2) 2区 SK121 (南から)   |
|      | (3) 2区 SK122 (南から)    | (4) 2区 SK125 (南から)   |
|      | (5) 2区 SK132 (南から)    | (6) 2区 SK136 (北から)   |
| 図版 7 | (1) 2区 SK137 (北から)    | (2) 3区 SE424 (東から)   |
|      | (3) 3区 SE428 (東から)    | (4) 3区 SK421 (西から)   |
|      | (5) 3区 SK422 (西から)    | (6) 3区 SK423 (西から)   |
| 図版 8 | 出土遺物                  |                      |

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

福岡市土木局宮崎連続立体開発事務所換地課長より平成6(1994)年8月24日付、土管第476号により同市教育委員会文化財部埋蔵文化財課長宛てに東区馬出・箱崎・宮松、博多区吉塚本町における福岡都市計画事業 宮崎上地区画整理事業(事業面積:27.8ha)に伴う埋蔵文化財事前審査についての依頼が行われた(事前審査番号:7-1-50)。

同事業は、平成4年1月17日に都市計画決定が行われ、同年9月14日の事業計画決定がなされた。その事業目的は、東区を中心地域として位置付けられている箱崎地区の道路や公園等の公共施設の未整備や、土地細分化、家屋密集等による市街地環境の低下、また道路と鉄道(JR鹿児島本線・篠栗線)の平面交差による踏切事故や慢性的交通渋滞等の問題を解消するため、土地地区画整理による総合的なまちづくりを行なうことで、都市計画道路等の整備・改善や鉄道高架による道路との立体交差化、またその高架事業に伴うJR箱崎駅の移設を実施し、良好な市街地の形成と都市機能の向上を図るものである。

埋蔵文化財課では、事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれていることから、平成6年9月14日より建物移転の終了した箇所を順次試掘調査している。なお、事業面積が広範なことや一部の建物移転交渉が難航したことにより、試掘調査は現在まで継続して行っている。これまでの試掘調査の結果、中世を主体とする遺構が、東側はJR鹿児島本線、西側が事業地西端の都市計画道路 堅粕・箱崎線(通称:妙見通り)、北側がJR(新)箱崎駅西口広場付近、南側が事業地南端の範囲、面積約35,000㎡において確認できた(第3図参照)。この試掘結果をもとに両課は、当該地の埋蔵文化財保存を前提とした協議を行ったが、1号公園部分(事業面積:2,500㎡)を除き、事業計画上、遺構の破壊が回避できないことが判明したため、平成11年度から本調査を、また平成14年度から資料整理・調査報告書作成を継続して行うこととなった(第2表参照)。なお、これらに係る費用は事業主体である土木局宮崎連続立体開発事務所が負担した。

## 2. 調査の組織

**調査委託:**福岡市土木局 宮崎連続立体開発事務所

**調査主体:**福岡市教育委員会 文化財部埋蔵文化財課

**調査総括:**埋蔵文化財課長 山崎純男

同課調査第2係長 力武卓治(前任) 田中壽夫(現任)

**調査庶務:**文化財整備課 谷口真由美(前任) 御手洗清(現任)

**調査担当:**同課調査第2係 榎本義嗣(現 同部文化財整備課整備係)

**調査作業:**金子國雄 清田厚巳 熊本義徳 小林義徳 坂田武 関哲也 米倉國弘 石橋テル子

金子澄子 唐島栄子 草場恵子 小林スエ子 酒井康恵 坂田ミネ 杉村百合子

田崎アヤ子 辻美佐江 永松トミ子 吉村智子

稲田健二 上田龍児(以上福岡大学学生) 井本俊亮 花島祐 山口耕平(以上別府大学学生) 渡邊誠(九州大学学生)

**整理作業:**西島信枝 松尾真澄 小林山美(中村学園大学学生)

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで土木局宮崎連続立体開発事務所、JR九州をはじめとする関係者の皆様方には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

## II. 遺跡の立地と環境

箱崎遺跡は博多湾岸に形成された箱崎砂礫とよばれる古砂丘上に立地している。この砂丘は東区箱崎から博多区堅粕、中央区天神・荒戸を経て、早良区百道に至っており、形成時期については少なくとも縄文時代晩期を下らないとする自然科学的知見が得られている。これらの砂丘は鞍部や旧河道により画されるものと考えられ、それぞれの微高地上には、第1図に示した範囲で現在までのところ、北側から箱崎遺跡、古塚本町遺跡群、吉塚祝町遺跡、野泊遺跡群、古塚遺跡群、博多遺跡群が知られている。

本遺跡はこの砂丘の北端部に位置し、西側を博多湾、東側を多々良川の支流である宇美川に囲まれる。この東側にはかつて「筥崎ノ津」と呼ばれた入り江が博多湾から湾入しており、後述する筥崎宮の私港として利用されていた。第2図は現在までの本調査および試掘調査で確認された砂丘面の標高を基に旧地形の等高線を推定した図を現況図に重ねたものである。なお、データが不足するエリアについては現況の標高差を参考とした。

これに拠ると砂丘尾根線の北端は第10次調査北側付近にあるものと推定される。遺跡北東端部で実施された同調査は東西方向に尾根線を分断しており、調査区のほぼ中央に標高2.8mの緩いピークが認められる。この尾根は第6次調査区付近から南西方向に延び、第7次調査区付近からやや東側に振れて、第2次調査区付近まではほぼ南北方向に延伸するものと考えられる。なお、筥崎宮本殿の南側には標高約3.5mを測る緩いピークが認められる。よって砂丘尾根は従来推定されていた通称「大学通り」に沿うものではなく、遺跡南半部では東側に大きく振れ、砂丘の西側には広い緩斜面が形成されていたものと考えられる。また、遺跡南東部の第26次調査8区から遺跡南西部の第27次調査区付近には東西方向の浅い谷が貫入し、砂丘鞍部を形成していたものと推定される。また、その鞍部を挟んだ南東側の第22次調査4区および第26次調査6区付近には標高約3.5mを測る高まりが認められ、その尾根は更に南側に延伸するものと考えられる。ただし、その東側は後述する様に河川による侵食が進み、砂丘東側斜面は殆ど認められない。

図中の網線は試掘調査等における遺跡の有無によって遺跡範囲を推定したもので、西側は標高2mの等高線がその内限をほぼ示している。東端部では遺跡東側を北流する宇美川によって砂丘端が開析され、崖面を形成するものと推定され、更にその東側では水性の顕著な堆積物が確認されている。第10次調査東端部や第30次調査15区では砂丘端部が検出されており、北東端部をおさえることができる。また、第8次調査の北側では試掘調査によって、時期不詳ながら抗列も確認されている。東限については、「I. はじめに」で先述した様に今回報告する筥崎上地区西整理事業に伴う試掘調査が現在も継続して行なわれており、既存のJR鹿兒島本線に沿うラインが該当する可能性が高い。遺跡の南端は、先述した様に南東側では鞍部を挟み、更に遺跡範囲が南に拡大する可能性が高い。また、北側では第36次調査において密度の濃い遺構群が確認されており、北側についても従来推定されていた遺跡範囲が拡大することが明らかになってきた。該地におけるより詳細な旧地形の解明および遺跡範囲の確定は今後の調査課題の一つといえよう。

この遺跡の発展の契機となった歴史的事象としては筥崎宮の創建をまず挙げることができる。延喜21年(921)、大宰府観世音寺巫女に八幡大菩薩の託宣があり、延長元年(923)に穂波郡大分宮を遷座、創建したと伝えられる。これは新羅來寇を防ぎ、対外貿易の拠点としての発展を祈念したものと考えられる。その後保延6年(1140)には善権宮とともに大宰府の府領となる。仁平元年(1151)には大宰府検非違所の官人が軍兵を率いて博多とともに宋人追捕をおこなった際に筥崎宮に乱入している。文



第1圖 箱崎道路位置圖 (1/25,000)

永11年(1274)の元寇の際に宮崎家は焼失し、以後も数度の火災に遭っている。なお、元の再度の襲来に備え、建治2年(1276)には元寇防壁が箱崎地区の海岸線に薩摩国によって築かれる。また、韓国新安沖で発見された14世紀前半の沈没船からは「宮崎宮」銘の木簡が出土しており、該期の日本における大陸交易の基地の一つとして位置付けられる。

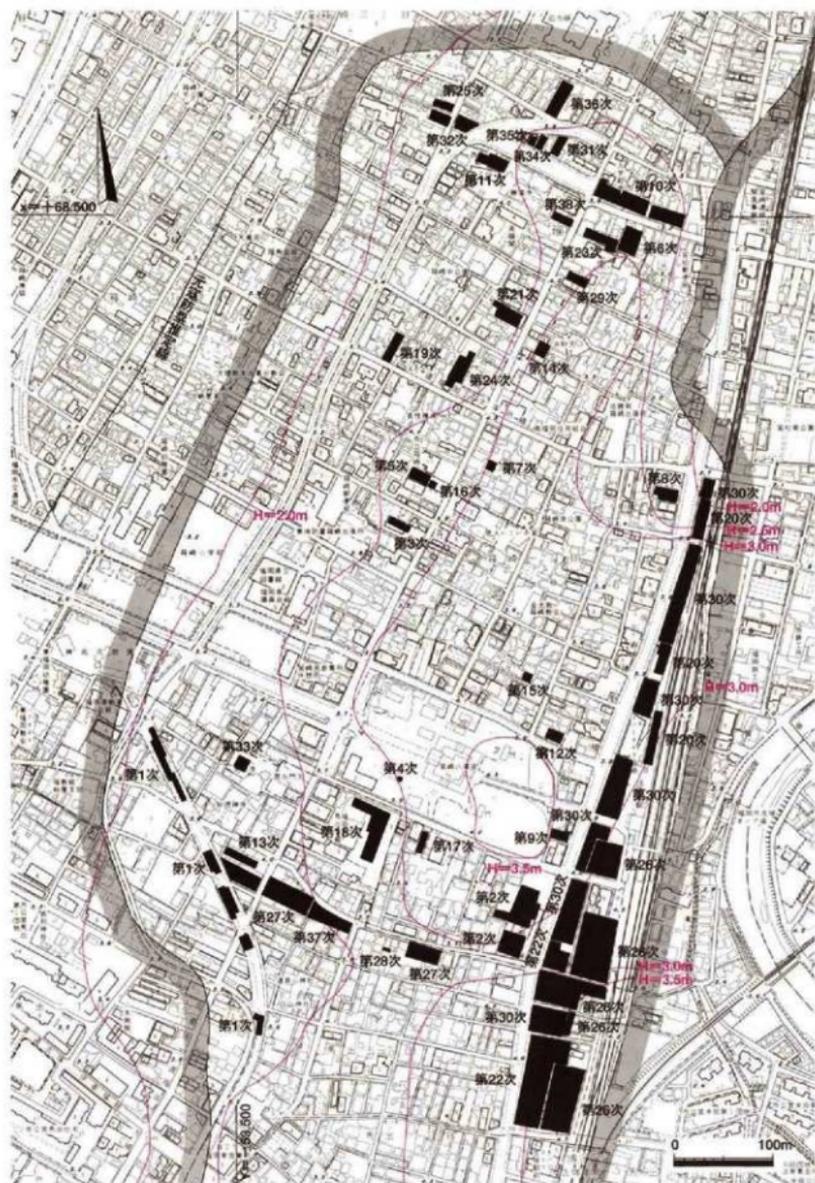
箱崎遺跡では現在までに38次の調査が実施され(第1表・第2図)、その时期的消長や遺跡内容が判明しつつある。これまでに最も古く位置付けられる遺物としては第6次調査出土の磨製石斧や本報告第20次調査出土の刻目突帯文の壺片がある。縄文時代晩期から弥生時代初頭の所産と考えられるが、後世の遺構からの出土である。第18次調査においては同様に中世遺構に混入し、弥生時代中期の土器片が確認されている。今後の調査において稀少であろうが、該期の遺構が確認される可能性がある。古墳時代では第8次・20次・22次・26次・30次において穴住居や周溝墓をはじめとする遺構が検出されている。第8次調査では前期の良好な一括遺物が出土している。また、第10次・15次においては該期の遺物の確認例がある。これらは前期を主体とするが、中期、後期の遺構・遺物も散見される。なお、いずれも推定砂丘尾根から陸側の東側緩斜面上に立地する調査区からの検出であり、比較的安定した自然環境を選択した集落経営が看取される。その後は奈良時代の遺物が第10次調査において近世井戸から出土した例を除き、数世紀の断絶が認められる。宮崎宮創建時の10世紀代の遺構は同宮の南東側に近接する第2次・22次・26次・30次調査区において確認されており、先に述べた、砂丘鞍部の在り方とを勘案すると前述した港湾施設がその東側に存在する可能性が唆される。11世紀代では前代とは類似する範囲の第2次・9次・12次・22次・26次・30次等において該期の遺構が確認され、これらは尾根線およびやや東側を下った緩斜面上に立地する。井戸等の生活遺構の存在から中世集落形成の端緒として指摘される。12世紀中頃からは第3次・5次・17次・18次・21次調査例等が示す様に西側緩斜面の利用が開始され始め、12世紀後半には遺跡の広範囲に集落が展開する。13世紀以降もほぼ全域に集落が確認されているが、海側の西側斜面を積極的に生活の場として活用している。第11次・14次・24次・21次調査では重層的な調査が実施され、包含層上面で13世紀から14世紀、下面において12世紀から13世紀の遺構が検出されている。中世後半期においても各所で遺構が確認されているが、前半期に比してやや少数である。第13次調査では短冊形の地割を示す遺構分布が看取され、当時の町屋構造を示す好例である。

#### 〈参考文献〉

- ・小林 茂他編『福岡平野の古墳域と遺跡立地』九州大学出版会 1998年
- ・川流 昭二編『よみがえる旧日』東アジアの国際都市 博多 平凡社 1988年

調査次数	調査年度	主な遺構の時期	縮 文	調査次数	調査年度	主な遺構の時期	縮 文
第1次	1983	12世紀後半～15世紀	『西の原遺跡』市報第105集(1983)	第20次	1999	古墳時代前期～中期	本報告『箱崎14』市報第705集(2003)
第2次	1985	10世紀後半～15世紀	『箱崎遺跡』市報第79集(1987)	第21次	2000	12世紀中頃～14世紀	『箱崎13』市報第705集(2002)
第3次	1989	12世紀中頃～15世紀	『考古学雑誌2』市報第252集(1991)	第22次	2000	3世紀時代遺跡、10世紀～15世紀	『箱崎中』市報第704集(2002)
第4次	1989	11世紀	市報第Vol.4(1991)	第23次	2000	12世紀、13世紀後半～14世紀	『箱崎12』市報第704集(2002)
第5次	1991	12世紀～15世紀	『箱崎3』市報第273集(1992)	第24次	2000	12世紀後半～14世紀	『箱崎13』市報第704集(2002)
第6次	1994	12世紀後半～15世紀	『箱崎遺跡4』市報第456集(1996)	第25次	2001	13世紀～14世紀	『箱崎12』市報第704集(2002)
第7次	1994	12世紀前半～13世紀	『箱崎遺跡4』市報第456集(1996)	第26次	2001	古墳時代前期、10世紀～15世紀	『箱崎中』市報第704集(2002)
第8次	1996	古墳時代前期、10世紀～15世紀	『箱崎7』市報第591集(1999)	第27次	2001	11世紀後半～15世紀	『箱崎11』市報第664集(2001)
第9次	1996	11世紀～15世紀	『箱崎遺跡5』市報第530集(1998)	第28次	2001	15～16世紀	『箱崎中』市報第704集(2002)
第10次	1996	12世紀前半～13世紀	『箱崎6』市報第551集(1998)	第29次	2002	12世紀後半～13世紀	『箱崎中』市報第704集(2002)
第11次	1997	12世紀後半～13世紀	『箱崎8』市報第592集(1999)	第30次	2002	古墳時代、10世紀～15世紀	『箱崎中』市報第704集(2002)
第12次	1997	11世紀～13世紀	『箱崎7』市報第591集(1999)	第31次	2002	12世紀後半～13世紀	『箱崎中』市報第704集(2002)
第13次	1997	15世紀	『箱崎8』市報第592集(1999)	第32次	2002	13世紀～14世紀、10世紀～15世紀	『箱崎中』市報第704集(2002)
第14次	1998	12世紀後半～14世紀前半	『箱崎9』市報第625集(2000)	第33次	2002	12世紀後半～13世紀	『箱崎中』市報第704集(2002)
第15次	1998	11世紀後半～12世紀	『箱崎中』市報第704集(2002)	第34次	2002	12世紀後半～14世紀	『箱崎中』市報第704集(2002)
第16次	1998	12世紀～15世紀	『箱崎11』市報第664集(2001)	第35次	2002	12世紀後半～14世紀	『箱崎中』市報第704集(2002)
第17次	1998	12世紀中頃～16世紀	『箱崎12』市報第664集(2001)	第36次	2002	13世紀後半～15世紀	『箱崎中』市報第704集(2002)
第18次	1999	12世紀中頃～16世紀	『箱崎10』市報第664集(2001)	第37次	2002	12世紀後半～14世紀	『箱崎中』市報第704集(2002)
第19次	1999	12世紀後半～14世紀	『箱崎10』市報第664集(2001)	第38次	2002	13世紀～15世紀	『箱崎中』市報第704集(2002)

第1表 箱崎遺跡調査一覧表



第2図 箱崎遺跡調査区位置図 (1/5,000)

### Ⅲ. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

今回報告する第20次調査区は、東区箱崎1丁目4・5番地内に所在し、箱崎遺跡の立地する古砂丘の東側緩斜面上に位置している。発掘調査区は3地点に分れており、北側から1区、2区、3区と呼称した。なお、下表に示すとおり、宮崎十地区画整理事業に伴う調査については、この調査区呼称を調査回数や調査年度に関らず、調査着手順に通し番号としている。

今回の発掘調査は、平成11(1999)年12月13日、重機による1区の表土剥ぎ取りから開始し、調査区順に発掘調査を実施した。各調査区では、古墳時代および中世の竪穴住居や井戸、土坑等を検出できた。平成12年3月31日に器材撤収を行い、調査は終了した。3調査区での調査総面積は、882㎡である。

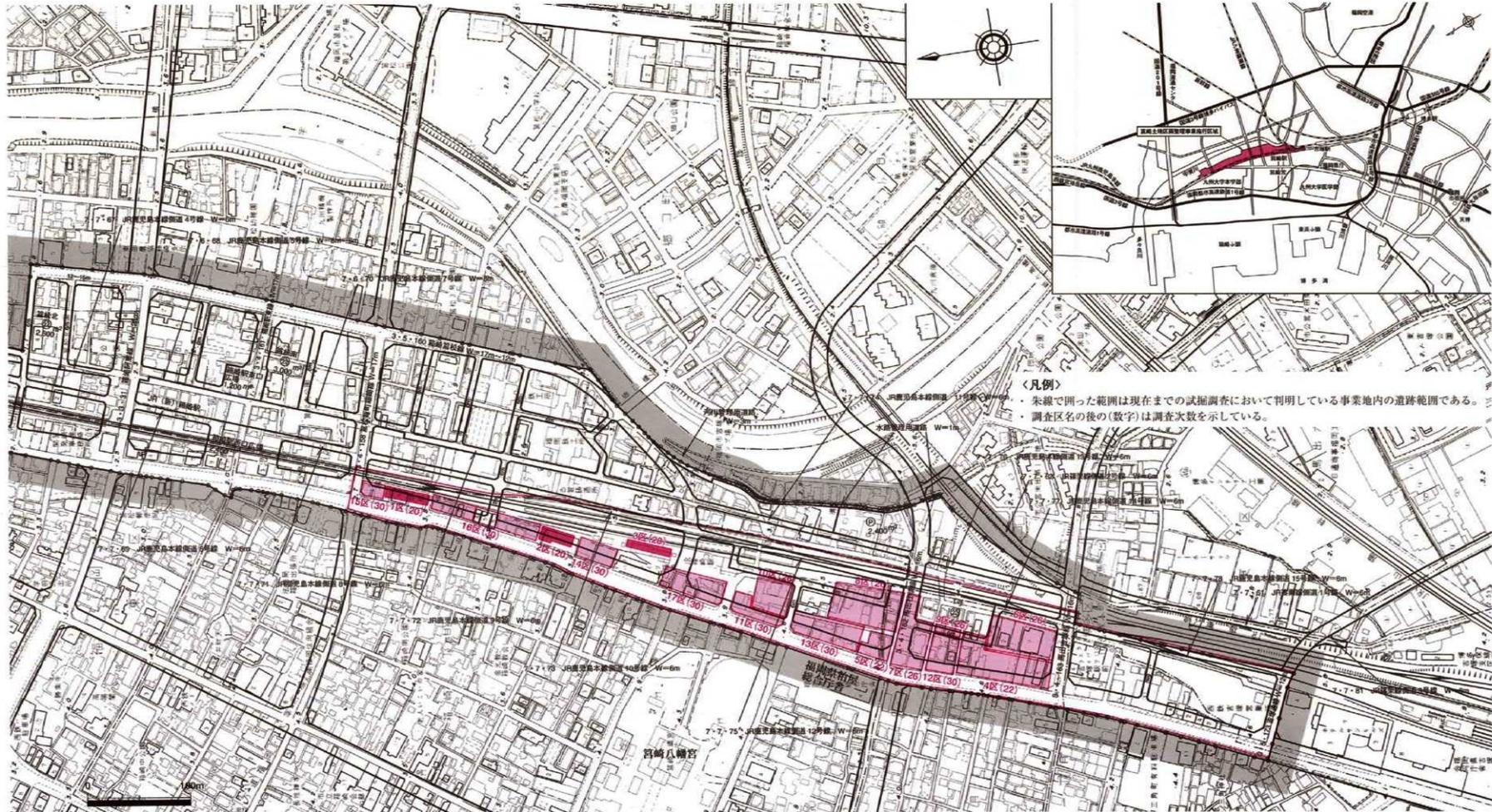
調査時の遺構番号は、0001から4桁の通し番号を遺構の種類に関らず付した。その番号には欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっては、原則的に調査時の遺構番号を用いるが、1桁目の0を除いた3桁の遺構番号とし、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。なお、調査時には、1区では0001～0102、2区では0121～0413、3区では0421～0615の遺構番号を用いた。

今回の調査は、区画整理事業という性格上、街区や道路形状が、事業施工後には現況と大きく変化するため、国土座標(第Ⅱ座標系)による調査区の管理を行っている。また、調査区内での遺構位置を本文中で示す際には調査時における座標軸を基準とした10m単位での英字(西から東方向にA、B)と数字(北から南方向に1、2、…)とによるグリッド表記(付図参照)を用いる。

以下、各区毎に検出遺構と出土遺物について報告する。

調査年度	調査回数 (いずれも箱崎遺跡)	調査番号	発掘調査区		報 文
			調査区名	調査面積	
1999 (平成11)年度	第20次	9959	1区	254㎡	本報告 [箱崎14] 市報第767集 (2003)
			2区	300㎡	
			3区	328㎡	
2000 (平成12)年度	第22次	0022	4区	2,473㎡	2003年度刊行予定
			5区	503㎡	
2001 (平成13)年度	第26次	0108	6区	1,180㎡	2003年度刊行予定
			7区	1,296㎡	
			8区	1,859㎡	
			9区	100㎡	
			10区	820㎡	
2002 (平成14)年度	第30次	0210	11区	542㎡	2004年度刊行予定
			12区	715㎡	
			13区	1,203㎡	
			14区	450㎡	
			15区	208㎡	
			16区	1,279㎡	
17区	600㎡				

第2表 宮崎十地区画整理事業地内調査一覧表



〈凡例〉

・朱線で囲った範囲は現在までの試掘調査において判明している事業地内の遺跡範囲である。

・調査区名後の(数字)は調査次数を示している。

第3図 宮崎士地区画整理事業地内調査区位置図 (1/3,000)

## 2. 1区の調査

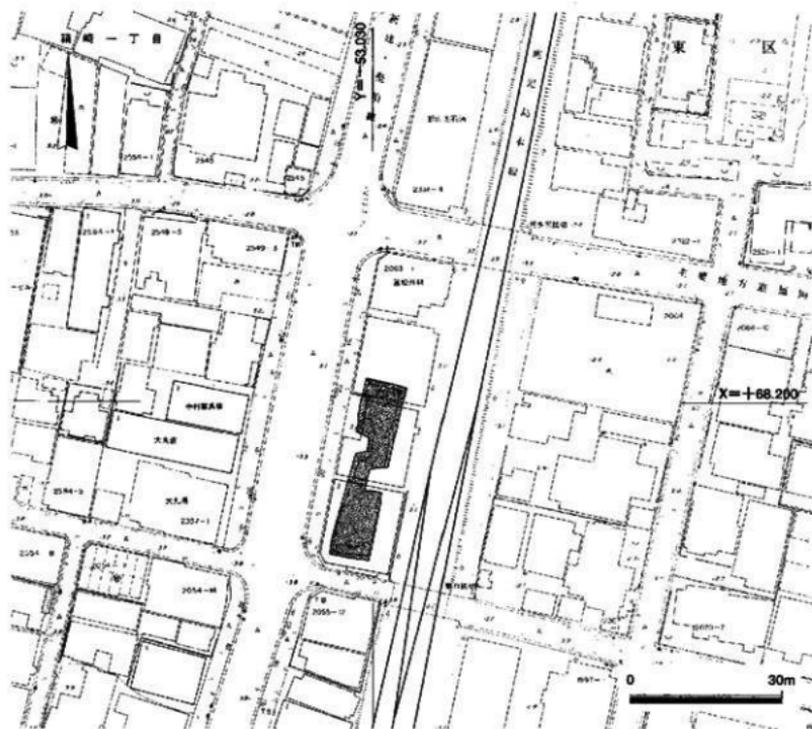
### 1) 概要

1区は箱崎1丁目5番地内に所在し、箱崎遺跡の北東端に位置する。調査前の状況は、店舗解体後の平地であった。調査区北半部は、既存した建物の基礎による擾乱が著しく、遺構の遺存状況は不良であった。

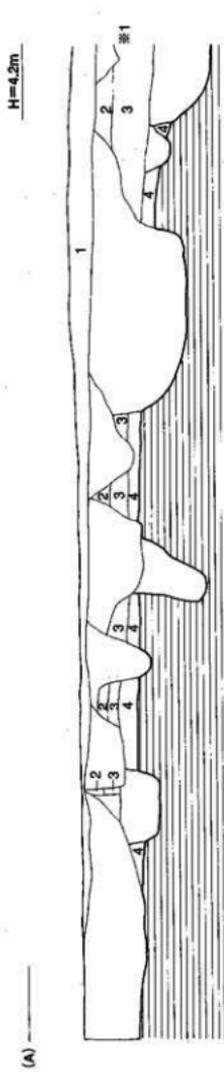
調査区の層序(第5図 西壁南半部十層図参照)は、表層の真砂上(1層)下に近現代の擾乱が多く認められるが、1層下には、暗灰茶褐色上(2層)、暗褐色砂質土(3層)、暗褐色砂質土混じりの暗黄褐色砂(4層)が堆積する。その下層は砂丘基盤である黄褐色砂で、北側へ傾斜している。また、調査区南端から約8m付近より砂丘の傾斜が強くなる。砂丘面の標高は、南端部で約3.1m、北端部は擾乱が著しいものの、遺存する砂丘面は約2mを測り、第2図にがした様に、砂丘北東端部への傾斜が看取される。なお、今回の調査は、砂丘基盤である黄褐色砂層上面で実施したが、土層観察では、遺構の大半は4層上面より掘り込まれている。

本区で検出した遺構は、古墳時代と中世の2時期に大別され、前者では堅穴住居等、後者では井戸、土坑、溝、埋葬遺構等を検出した。

発掘調査は平成11(1999)年12月13日、重機による表土剥ぎ取りから開始した。廃土処理を本調査区



第4図 1区調査区位置図(1/1,000)



H=4.2m (B)



- 1区西壁土層
- 1 真砂土
  - 2 暗赤褐色土 (やや砂質、炭化物含む)
  - 3 暗褐色砂質土
  - 4 暗赤褐色砂 (暗褐色砂質土に属する)



第5図 1区西壁土層実測図 (1/50)

内で行わざるを得なかったため、調査区のはほぼ中央を境界として、まず北半部の調査を行うこととした。重機による掘削作業と並行して、発掘器材の搬入を行い、同月16日より人力作業を開始した。北半部の調査終了後、同月27日から重機によって廃土を反転し、南半部の表土剥ぎ取りを行なった。平成12年1月7日から人力作業に着手し、全作業終了後、同月25日の重機による埋め戻しをもって1区の調査を完了した。本調査区の調査面積は、254㎡である。

## 2) 遺構と遺物

### (1) 竪穴住居 (SC)

古墳時代前期の竪穴住居と考えられる遺構を1基検出確認した。当初の遺構検出時には、判然としなかったが、この遺構を切る中世のピット壁面から古式土師器が出土したことにより、周囲全体を下げながら精査し、平面プランを検出した。

SC025 (第6図) A・B-4区で確認した。隅丸方形の竪穴住居と考えられ、SF023、SK021に切られる。また、遺構の大半は調査区外に位置するため、南西コーナー部分を検出したにとどまっている。壁面は約20cmが遺存し、南側にはベッド状の高まりが認められたが、壁溝や柱穴は調査区内において確認できなかった。覆土は極めて淡い茶褐色砂である。

出土遺物 (第6図) 1~12は土師器である。1~4は畿内系の甕で、1・2は口縁端部をつまみ上げ、ヨコナデを行なう。1は2に比して長く立ち上がる。3は頸部から胴部上半にかけての薄片で、内外面にヘラ削りを施す。4は胴部上半に粘土接合部と考えられる鈍い稜を有し、外面のその上半部は縦方向の刷毛目、下半部は斜方向の刷毛目を行なう。内面はヘラ削りを施す。5は畿内系の単口縁甕の口縁部で、頸部から上方に広がる。内外面共にヨコナデ調整を加える。6~12は鉢で、6~10は外反する口縁部を有するものである。6は内面に稜を有するもの、外反の度合いは緩い。口縁部にはヨコナデを施すが、内面には刷毛目が残る。胴部内面にはヘラ削りを行なう。7・8の口縁部は長く外反し、口縁部の内外面はヨコナデ、胴部内面はヘラ削り調整を施す。9は短く外反する口縁部を有し、口縁部外面にヨコナデを加えるが、他の器面にはヘラ研磨を施す。色調は黒褐色を呈する。10の口縁部は緩く外反し、短い。胴部外面には刷毛目を残す。11の口縁部は胴部から上方に立ち上がり、端部を尖り気味に収める。12は丸底の底部片で、器壁が厚い。外面には刷毛目を残すが、指ナデ調整を行ない、内面はヘラナデを施す。13・14は刻目突帯文系の甕の口縁部片である。共に色調はにぶい赤褐色で、面取りした口縁部からやや下がった位置に突帯を貼付し、板状工具による押し引きにより刻目を施す。本遺跡内では、最も時期の遡る時期の土器であり注目される。他にも土師器の細片や中世の混入遺物が出土している。

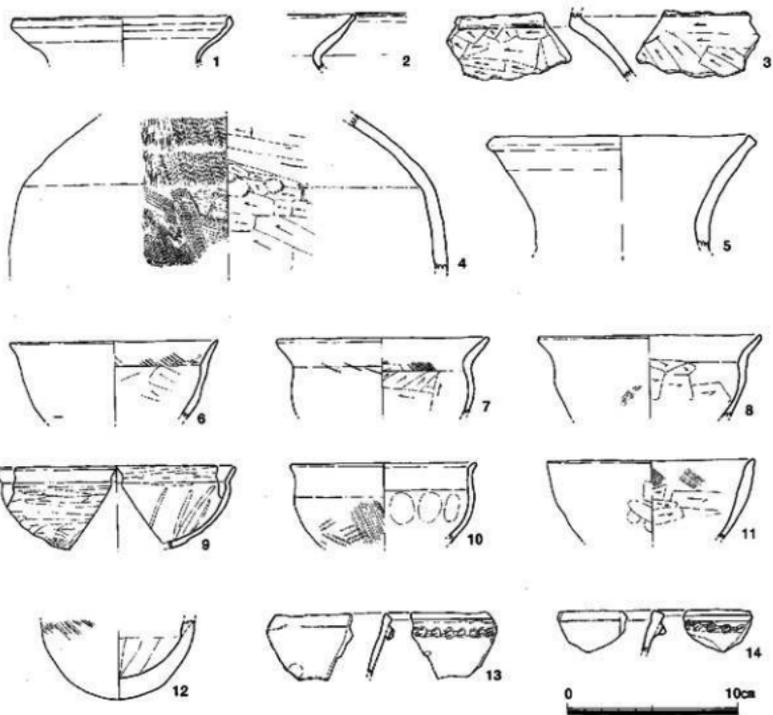
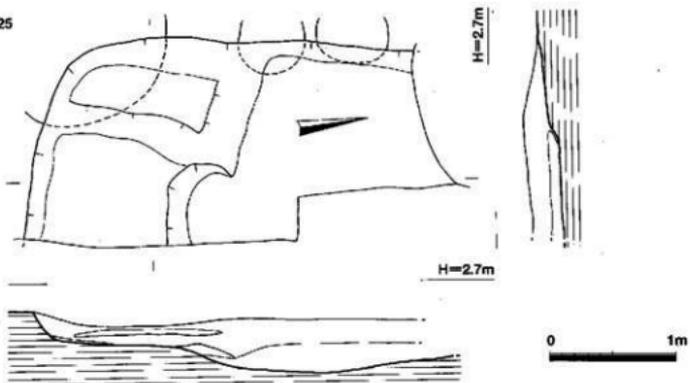
### (2) 井戸 (SE)

調査区南半部の隣接した位置において12世紀代の井戸3基を検出した。

SE022 (第7図) A-4区に位置する。SE024、SK021に切られるが、現況での掘り方は楕円形を呈し、長径は推定で4.5m、短径は3.1mを測る。上面から底面に向かってすぼまり、深さは2.4mを測る。覆土はやや粘性のある灰褐色砂質土と暗黄茶褐色砂質土が互層をなしており、中央井筒部分は暗灰褐色粘性砂質土が覆土中位から確認できた。底面付近には径約70cmの木桶が高さ約20cm遺存していた。底面の標高は0.4mを測り、湧水は認められなかった。

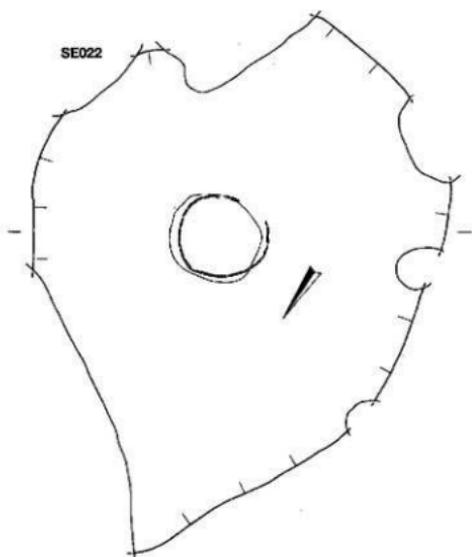
出土遺物 (第7図) 15は復元口径8.5cmを測る土師器小皿である。回転系切り底で、板状圧痕はない。16~18は白磁である。16は玉縁状の口縁部を呈する碗Ⅳ類、17は碗Ⅴ類で、見込みの軸を輪状にカキ取る。18は皿Ⅲ-2類で、体部外面の下半は露胎である。軸色はオリブ灰色を呈する。19は混入と考えられる上層出土の龍泉窯系青磁碗Ⅲ-2類である。体部外面に蓮蓬弁文を有する。20は同安

SC025

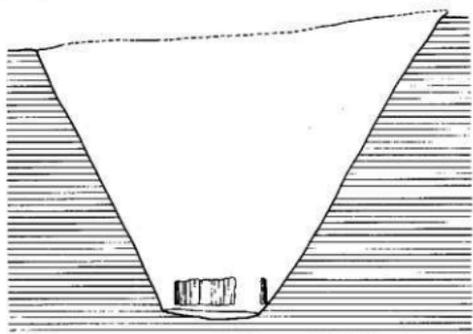


第6図 SC025実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

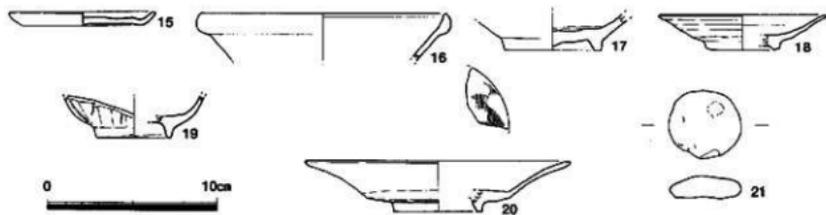
SE022



H=3.0m

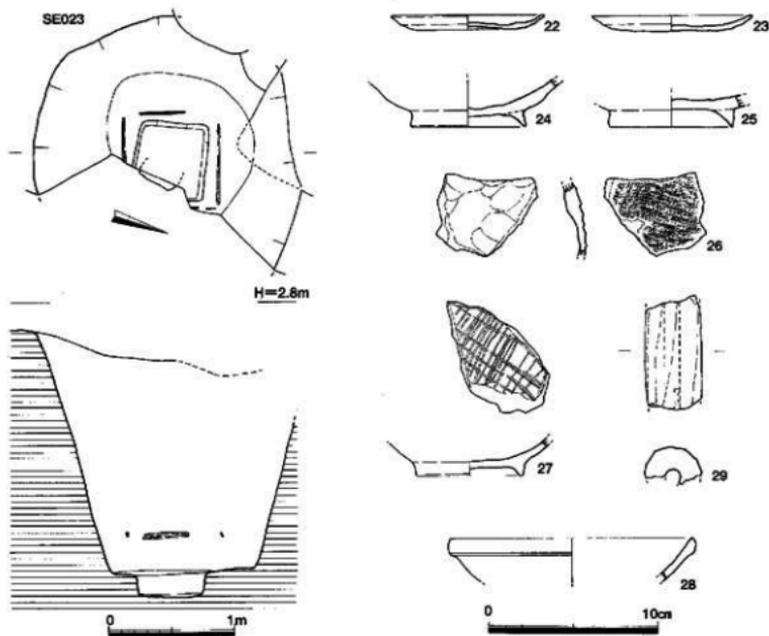


0 1m



0 10cm

第7図 SE022実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

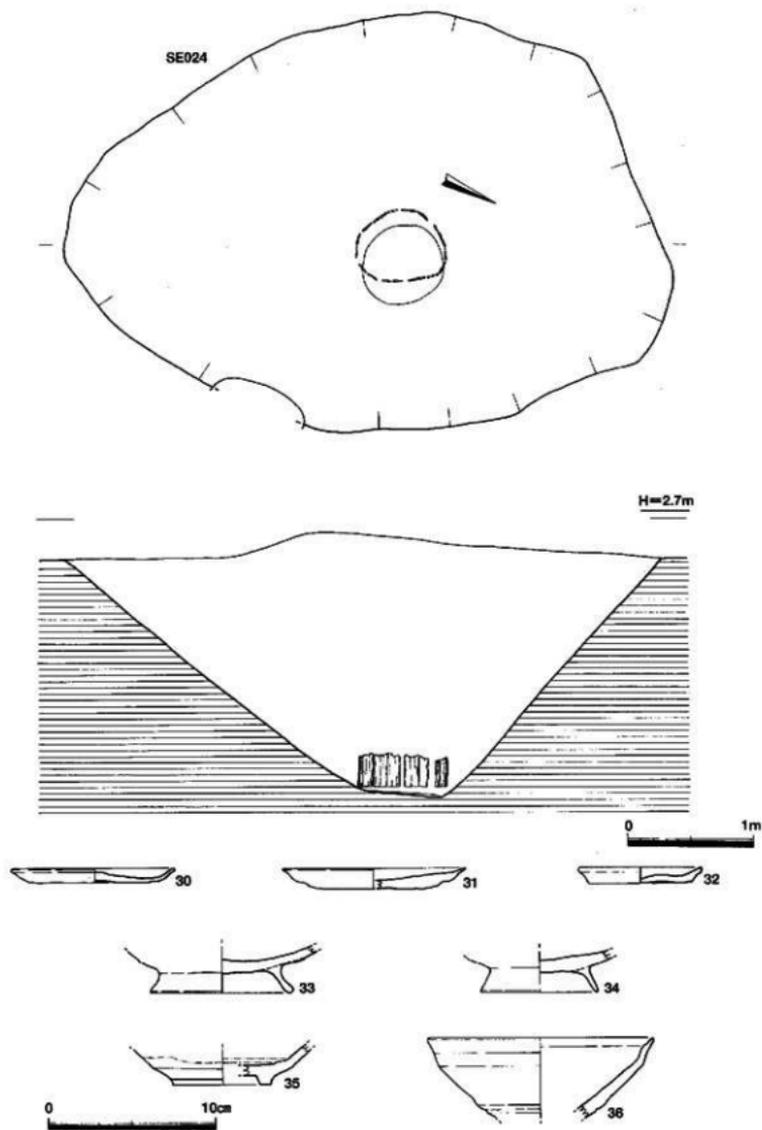


第8図 SE023実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

窯系の高台付皿である。体部下位で屈曲し、口縁部は大きく外反する。見込みには櫛状工具による施文を有する。体部外面下半は施軸しない。21は円盤状の上製品で、径4.3cm、厚さ1.3cmを測る。指オサエによる調整を行う。他に土師器碗、瓦器、中国陶器、滑石製品等の細片が出土している。以上の出土遺物やSE024との切り合い関係から12世紀中頃の井戸と考えられる。

SE023(第8図) A・B-3・4区で検出した。東半部は調査区外に位置するが、径約2.2mの円形の掘り方を呈するものと考えられる。覆上は暗褐色砂質土を主体とし、暗黄褐色砂が混じるが、中央部分には井筒の痕跡と推定される黒味の強い暗褐色粘性砂質土が認められた。検出面からの深さ1.9mに平坦面を設け、井筒の下部を掘える1辺約0.6m、深さ0.2mの浅い方形の掘り込みを有する。その上面および壁面には水溜りに用いられた血物と考えられる痕跡が確認できた。また、平坦面の上位には厚さ2cm前後、幅5cmの横棧材が遺存しており、井筒の一部と考えられる。なお、底面は標高0.45mを測り、湧水しない。

出土遺物(第8図) 22・23は回転ヘラ切り底の土師器小皿で、共に板状圧痕はない。順に復元口径は9.0、9.4cmを測る。24・25は土師器碗で、断面逆台形の高台を貼付する。26は土師器甕の小片で、頸部から胴部上半の資料と推定されるが、傾きは不明瞭である。外面は木目直交の平行叩き具による叩き、内面は指オサエが顕著に残る。27は畿内産瓦器碗で、見込みには粗い格子状の暗文風のヘラ研



第9図 SE024穴測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

磨が施される。外面はヨコナデ調整を加える。28は白磁碗Ⅳ類である。29は筒形の管状上錘で、復元径3.4cm、内径0.9cmを測る。外面は鈍い面取りを行なう。以上の出土遺物から12世紀前半の遺構と考えられる。

SE024 (第9図) A-3・4区で確認した井戸で、SE022を切る。平面プランは不整な楕円形をなし、長径4.8m、短径3.3mを測る。底面は径約0.6mの円形を呈し、漏斗状にすぼまる。現況での深さは2.1mを測る。覆上は暗褐色砂質土で黄褐色砂が混じるが、その中層からは井筒の腐食した暗灰褐色粘性土の円形プランがほぼ中央に認められた。また、底面付近には遺存状況不良ながら、厚さ約1cm、幅10数cmの板材を用いた木桶が検出できた。土圧による歪みがあるものの、その径は約60cmと推定される。底面の標高は0.5mで、湧水は認められなかった。

出土遺物 (第9図) 30~32は土師器小皿である。30・32は回転ヘラ切り底で、31には板状圧痕が認められる。復元口径は順に、9.6、10.8cmを測る。33の外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。復元口径は7.4cmである。33・34は土師器碗である。断面形状の細い高台が貼付される。35は白磁碗Ⅴ類で、見込みの軸を輪状にカキ取る。36は黒釉磁器の天目碗である。外面の下半部は露胎で、口縁部の軸は茶褐色を呈する。他に中国陶器や龍泉窯系青磁、瓦等の細片が出土した。以上の出土遺物から12世紀中頃の井戸と考えられる。

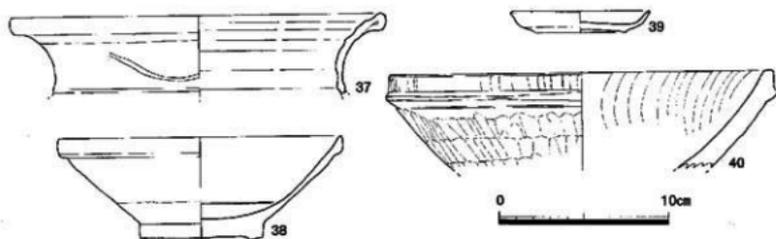
### (3) 土坑 (SK)

SK009 (第11図) B-2区で検出した土坑で、東側は調査区外に延びる。現況では隅丸長方形の平面プランを呈すると推定され、幅0.85m、深さ0.3mを測る。覆土は褐色砂質土で、出土遺物はなかった。

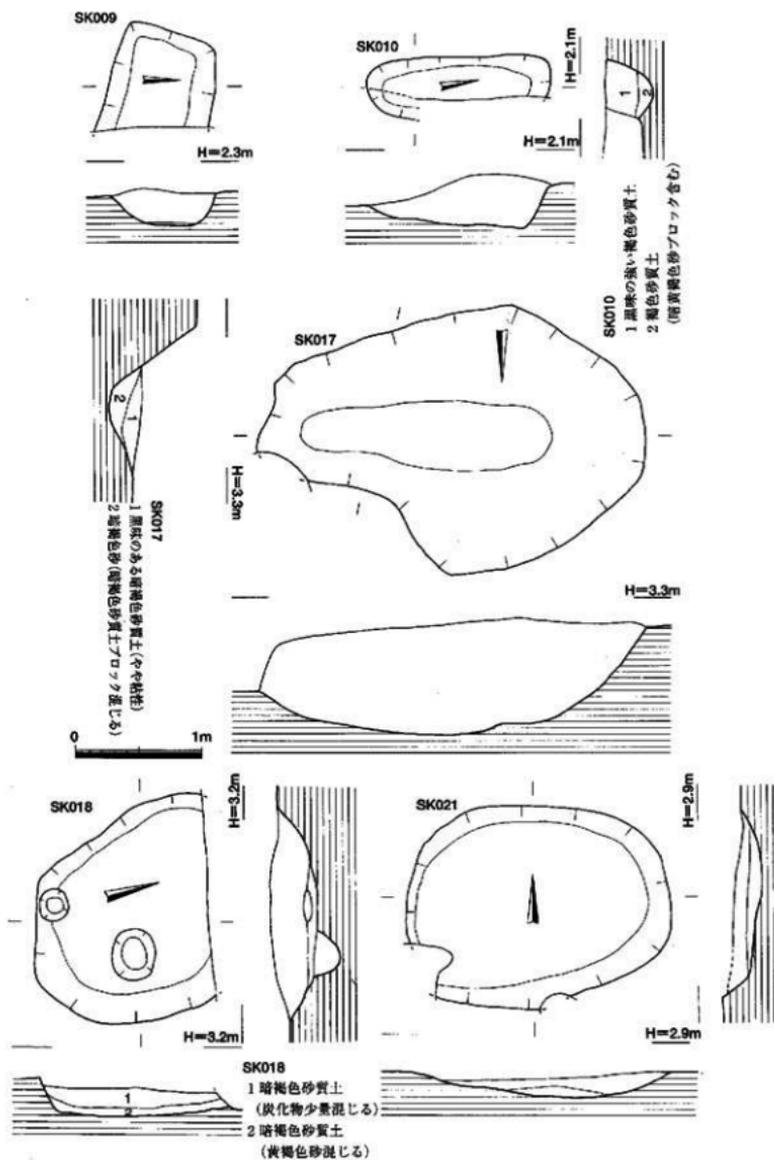
SK010 (第11図) B-2区に位置し、東側をSD005に切られる。不整な隅丸長方形プランをなし、長さ1.45m、深さ0.4m、幅は推定で約0.5mを測る。断面は船底形を呈する。なお、出土遺物は認められなかった。

SK017 (第11図) 調査区南西端のA-4区で検出した。北東側壁面は擾乱により削平を受けるが、平面プランは不整楕円形を呈するものと考えられ、長径3.05m、短径2.1m、深さ0.9m測る。底面は狭い長楕円形をなす。

出土遺物 (第10図37・38) 37は高麗陶器と考えられる壺である。口縁部は折り返し、肥厚させる。短い頸部にはヘラ状工具による1条の波状文が施文され、胴部との境界には1条の沈線が巡る。内外面共にヨコナデを施す。胎上は堅緻でにぶい赤褐色を呈するが、器面は暗オリーブ灰色である。38は白磁碗Ⅳ-1・a類で、見込みに沈線を有する。体部下半は露胎である。他に回転糸切りおよびヘラ切りの土師器、瓦器、滑石製品等の細片が出土している。以上の出土遺物から12世紀中頃の遺構と推



第10図 SK017・021出土遺物実測図 (1/3)



第11図 SK009-010-017-018-021実測図 (1/40)

定される。

**SK018** (第11図) A-4区に位置し、北側を攪乱に切られる。東西方向の幅1.7m、深さ0.3mを測る。底面はほぼ平坦で、2個の円形ピット状の掘り込みを有する。出土遺物には土師器、白磁、青磁等の細片が少量ある。

**SK021** (第11図) A-4区で検出した。SC025およびSE022を切る楕円形の上坑で、長径2.1m、短径1.6mを測る。断面は浅皿形を呈し、深さは0.2mである。覆上は黒味のある暗褐色砂質土で粘性が強い。

出土遺物(第10図39・40) 39は復元口径8.2cmを測る回転糸切り底の土師器小皿である。板状圧痕はない。40は滑石製石鍋で、復元口径22.6cmを測る。口縁下には漸面台形の低い鈎を削り出す。外面にはノミによる縦方向の削痕が認められるが、内面は丁寧な研磨を施す。外面に煤の付着はない。他に瓦質土器や須恵質土器等の細片が出土している。これらの出土遺物から13世紀後半の遺構と考えられる。

#### (4) 溝(SD)

**SD005** (第12図) SK010を切る南北方向の溝で、B-1・2区に位置する。北側および東側層は調査区外に延長するが、南側は端部を確認し得た。既存建物の基礎や攪乱により遺存状況は悪い。断面は逆台形を呈し、深さは0.3mを測る。延長方位はN-14°-Eである。

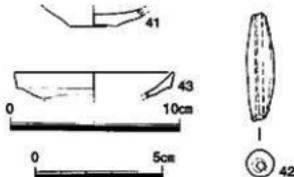
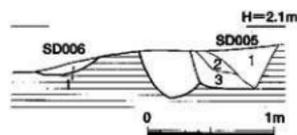
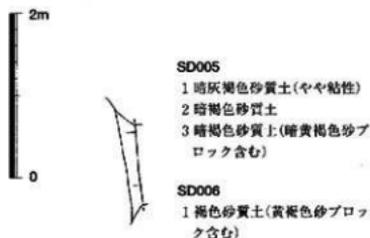
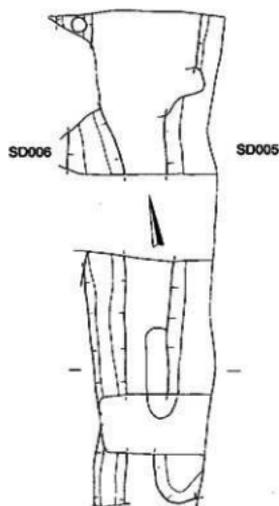
出土遺物(第12図41・42) 41は白磁皿Ⅵ類で、外面は露胎である。内面にはオリーブ黄色の釉が施される。42は長さ4.3cm、重量4.9gを測る管状土鉢である。他に回転糸切り底の土師器、須恵質土器、瓦等の細片が出土した。

**SD006** (第11図) SD005の西側約0.6mに並行する。北側は調査区外に延伸し、南側は攪乱により端部を確認できていない。幅0.5~0.9m、深さ0.1~0.2mを測り、断面は浅皿形を呈する。延長方位はN-7°-Eにとる。

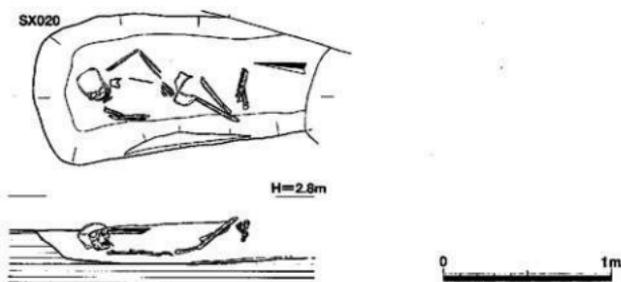
出土遺物(第12図43) 43は白磁皿Ⅱ-2・b類で、外面の体部下半は露胎である。他に回転糸切り底の土師器、中国陶器等の細片が少量出土した。

#### (5) 埋葬遺構(SX)

**SX020** (第13図) A・B-4区で確認した土壌墓で



第12図 SD005-006実測図(断面図は1/40、平面図は1/80)および出土遺物実測図(42は1/2、他は1/3)



第13図 SX020実測図 (1/30)

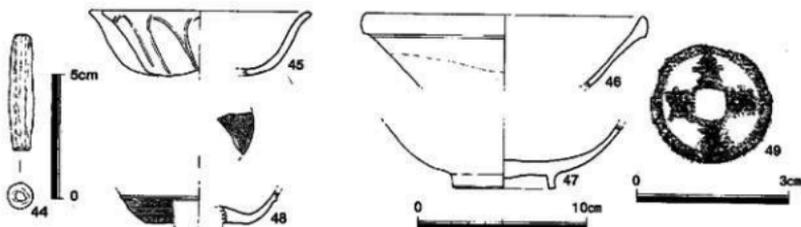
ある。南側は調査区外に位置するため全容は不明であるが、墓壇の平面プランは隅丸長方形と推測され、幅0.85m、長さは1.65mが遺存する。西側壁面には小規模なテラスを設ける。断面は逆台形を呈し、深さ0.25mを測る。墓壇内に遺存する人骨の出土状況は、頭を西側に向け、右腕は頭位方向に曲げる。左腕は緩く曲げた状態で、手を腹部に置いている。また、下肢は両膝を西側に倒した状態であった。頭位方向はほぼ北側で、 $N-6^{\circ}-W$ を測る。また、人骨は熟年女性とみなされる（中橋孝博『福岡市箱崎遺跡第20次・21次調査出土人骨』『箱崎遺跡13』福岡市埋蔵文化財調査報告書第705集 2002年参照）。覆土は淡茶褐色砂質土で、墓壇内に副葬もしくは供献と考えられる遺物はなかったが、回転糸切り底の土師器等の細片が少量出土している。

(6) その他の遺物 (第14図)

ここでは1区のピットおよび遺構検出時出土の遺物の一部をとりまとめて報告する。

44はA-4区 SP040から出土した管状土錘である。重量は4.2gを測る。45はB-4区 SP095出土の龍泉窯系青磁碗で、口縁部は緩く外反する。体部外面には片彫りによる蓮弁文を有する。

46~49は遺構検出時出土遺物である。46は白磁碗Ⅳ型で、外面下半は露胎である。器面には貫入が多い。47は龍泉窯系青磁碗で、高台際まで施釉される。48は李朝粉青沙器で、皿もしくは碗と考えられる。内外面に白色の象嵌を施す。外面には細い突帯が1条巡る。49は北宋代の銅銭「景德元寶」（初鑄年：1004年）である。



第14図 ピット・遺構検出時出土遺物実測図 (49は1/1、44は1/2、他は1/3)

### 3. 2区の調査

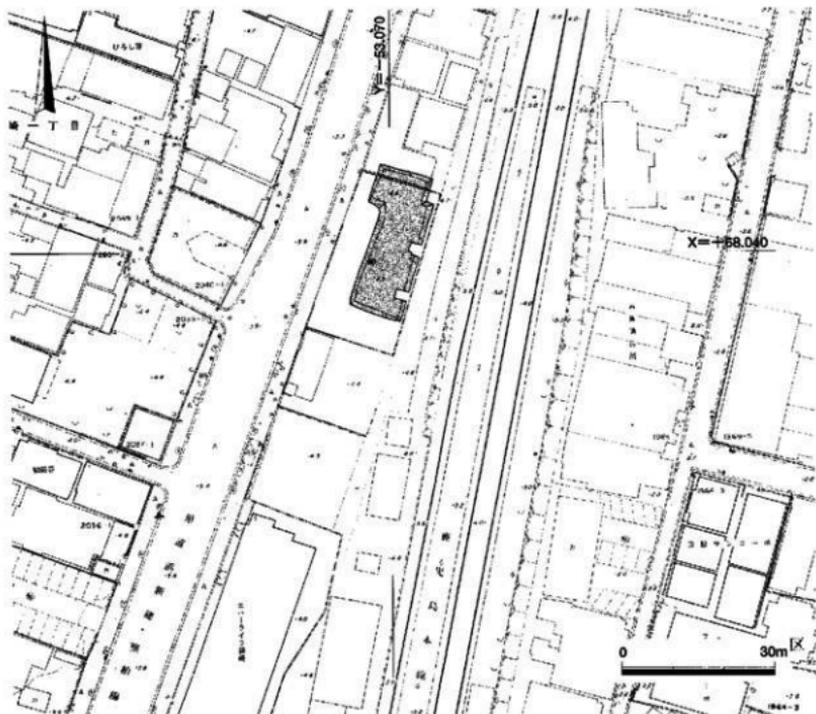
#### 1) 概要

2区は箱崎1丁目4番地内に所在し、箱崎遺跡の中央東端に位置する。調査前の状況は、その大半が駐車場として使用されていたため、平地であった。

調査区の層序(第16図 北壁土層図参照)は、表層のバラス(1層)下に2~7層がほぼ水平に堆積し、その下層は砂丘基盤である黄褐色砂となる。砂丘面の標高は、西側で約3.1m、東側で約2.9mを測り、東側に緩く傾斜していることから、本区は砂丘東側緩斜面に位置するものと考えられる。今回の調査は、砂丘基盤である黄褐色砂層上面で実施したが、土層観察によると遺構の大半は、砂丘上層に堆積する灰褐色砂質土(6層)もしくは暗褐色砂質土ブロックを含む暗黄褐色砂質土(7層)の上面より掘り込まれている。

検出した遺構は、1区と同様に古墳時代と中世の2時期に大別され、前者では竪穴住居等、後者では井戸、土坑等を検出した。

本区の調査は、1区の調査終了直後の平成12(2000)年1月24日、重機による表土剥ぎ取りから始めた。その重機による作業および1区の調査終了後の同月26日から人力作業を開始した。遺構の掘削が終了した2月28日に全景写真の撮影を行い、3月1日の重機による埋め戻しをもって2区の調査を完



第15図 2区調査区位置図 (1/1,000)

了した。本調査区の調査面積は、300㎡である。

なお、調査区外の西側および南側の「L」字状を呈する約270㎡については、本区と3区に決まれた箇所を設置されていた電柱の撤去工事のため、運搬車輛用通路を確保したことから未調査である。

## 2) 遺構と遺物

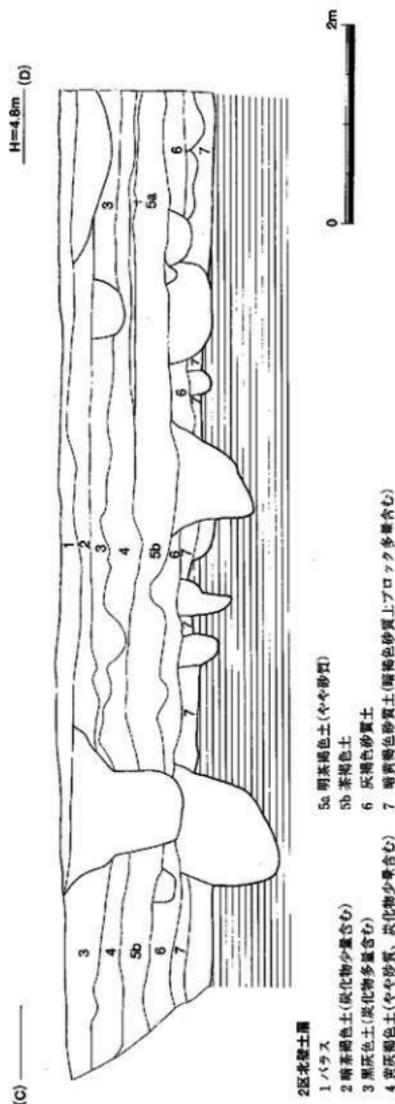
### (1) 竪穴住居 (SC)

古墳時代中期から後期の竪穴住居と考えられる遺構を2基検出確認した。

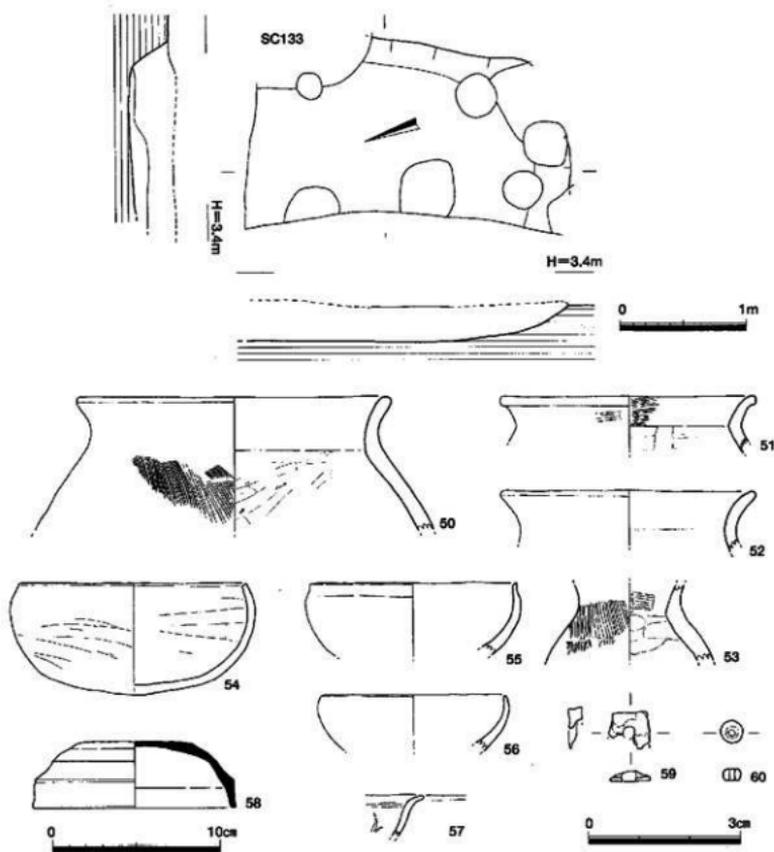
**SC133 (第17図)** 調査区北西端のA-1区に位置し、SK123、SP168等の遺構に切られるため、遺存状況は良好ではない。また、遺構の大半は調査区外に位置しており、調査区内では、方形住居の南東コーナー部分を確認したと考えられる。壁面は約30cmが遺存しているが、調査区内の床面で柱穴等は検出できなかった。覆土の上層は、砂丘砂と類似した黄褐色砂であったが、下層は茶褐色砂質土である。

**出土遺物 (第17図)** 50~57は土師器である。50~52は甕で、内面にヘラ削りを施す。53は小形の壺であろう。外面に粗い刷毛目調整を行い、内面には粘土接合痕が顕著に残る。54~57は鉢で、54は内外面にヘラ削りを施す。口縁端部は面取りを行い、内傾する。55~57は小片で、57の口縁部は外反する。58は須恵器の坏蓋で、復元口径は12.0cmを測る。天井部と体部との境界に稜を有する。端部は平坦である。59は滑石製白玉未製品の欠損品である。遺存する1辺は0.6cm、孔径は0.2cmを測る。他の未製品や滑石の剥片の精査に努めたが、確認できなかった。60は上層出土のガラス製小玉である。淡緑色を呈し、径0.4cm、厚さ0.25cmを測る。これらの出土遺物から6世紀前半代の遺構と考えられる。

**SC140 (第18図)** 調査区南西端のA-3区で検出した。SC133同様に大半が調査



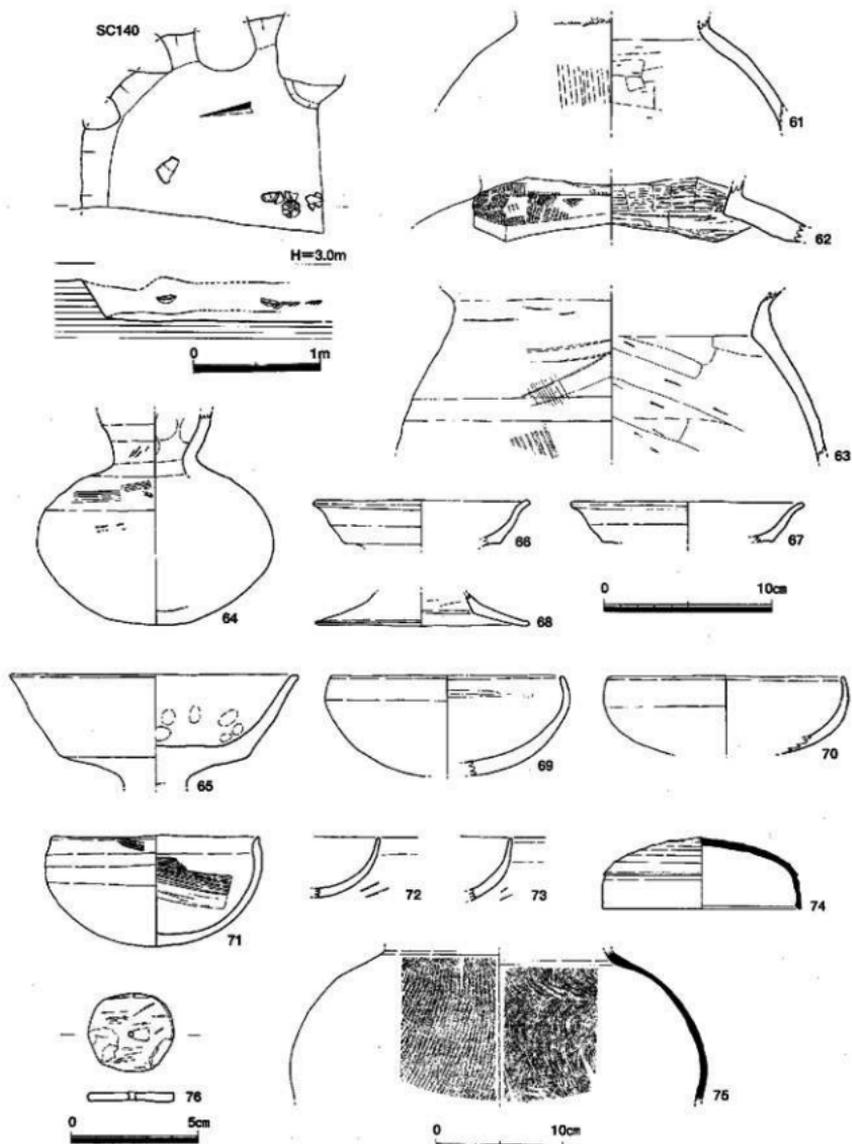
第16図 2区北壁土層断面図 (1/50)



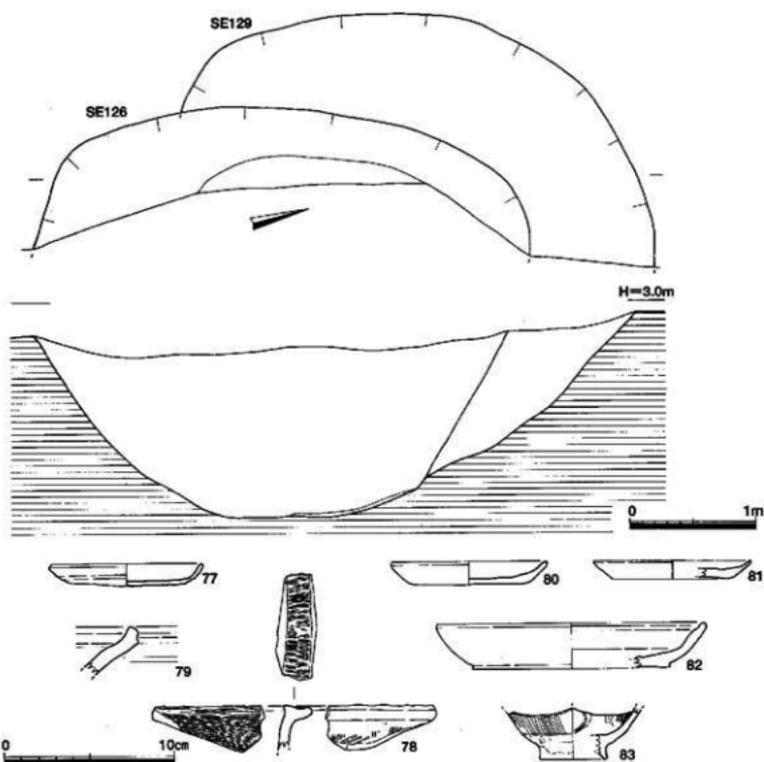
第17図 SC133実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (59・60は1/1、他は1/3)

区外に延びるため、全容は不明であるが、隅丸方形プランの竪穴住居の北東コーナー部分に該当すると推定される。壁面は約35cmが遺存し、床面は平坦である。南東端の壁面際で深さ約20cmの掘り込みを確認し得たが、大半は重複する遺構に切られる。覆土の上層は、SC133と同様に地山砂と類似しており、検出が困難であったが、下層は暗褐色砂である。また、床面から約10cm程度浮いた同一面上で、土師器 (61・64・66)、須恵器 (74・75) が出土している。

出土遺物 (第18図) 61~73は土師器である。61~63は甕で、外面に刷毛目、胴部内面にヘラ削りを行なう。62は口縁部内面に横方向の刷毛目を残す。64は丸底の壺である。桶球状の胴部に細い頸部が付く。外面の一部に刷毛目が残るが、ナデ調整を施す。65~68は高坏である。65~67は坏部で、ド



第18図 SC140実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (76は1/2、75は1/4、他は1/3)



第19図 SE126・129実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

半に屈曲部を有する。65の口縁部は直線的に開くが、66・67は外反する。68は脚部片で、筒部と裾部の内面境界に稜線を有し、ヘラ削りを行なう。69～73は鉢で、口縁部は内湾して収めるもの(69・70)、僅かに端部を外反させるもの(71)、直立気味に収めるもの(72・73)がある。71は内面の一部に刷毛目が残る。74・75は須恵器である。74は口径11.6cmを測る坏蓋で、完形に接合できた。天井部の広い範囲にヘラ削りを施し、体部との境界には稜が巡る。口縁端部内面は内傾し、凹線状に僅かに窪む。75は壺の体部上半で、外面は木目直交の平行叩き、内面には、青海波状の当て具痕が認められる。頸部との境界部分はヨコナデを加える。76は滑石製の有孔円盤で、器面に破損や剥落が認められるが、側縁部には研磨痕が残る。径2.9～3.4cm、厚さ0.4cm、孔径0.2cmを測る。以上の出土遺物から5世紀後半代の遺構と考えられる。

(2) 井戸 (SE)

SE126 (第19図) B-3区の調査区際位置し、SE128・129、SK130を切る。遺構の大半は調査区外に位置するため、全容は不明であるが、掘り方は径3.9m、深さ1.5m以上を測るものと推定される。

覆土は暗灰褐色砂質土を主体とし、暗黄褐色砂が互層に混じる。

出土遺物（第19図77～79） 77は口径8.7cmを測る回転糸切り底の土師器小皿で、板状圧痕を有する。ほぼ完形である。78は土師器鉢で、「L」字状の口縁部を呈する。内外面に刷毛目を施し、口縁部上面に茎状の圧痕が認められる。79は緑釉陶器片で、壺もしくは鉢の口縁部と考えられる。他に中国陶器、白磁、龍泉窯系青磁等の細片が出土している。以上の出土遺物から13世紀代に属する遺構と考えられる。

SE128（第20図） SE126の南側、B-3区調査区際で検出した。SE126に切れ、SK130を切る遺構である。壁面の一部を確認し得たのみで、大半は調査区外に位置している。壁面の傾斜や覆土から非戸と推定した。

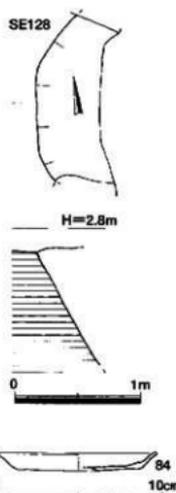
出土遺物（第20図） 84は復元口径9.2cmを測る土師器小皿である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。他に同様の土師器の細片が少量出土している。

SE129（第19図） B-3区に位置し、SE129に切れ、SK130を切る。SE126と同様に遺構の東側は調査区外に延び、掘り方の径は3.8m以上を測る。覆土は暗黄褐色砂に暗灰褐色砂質土がブロック状に混じる。

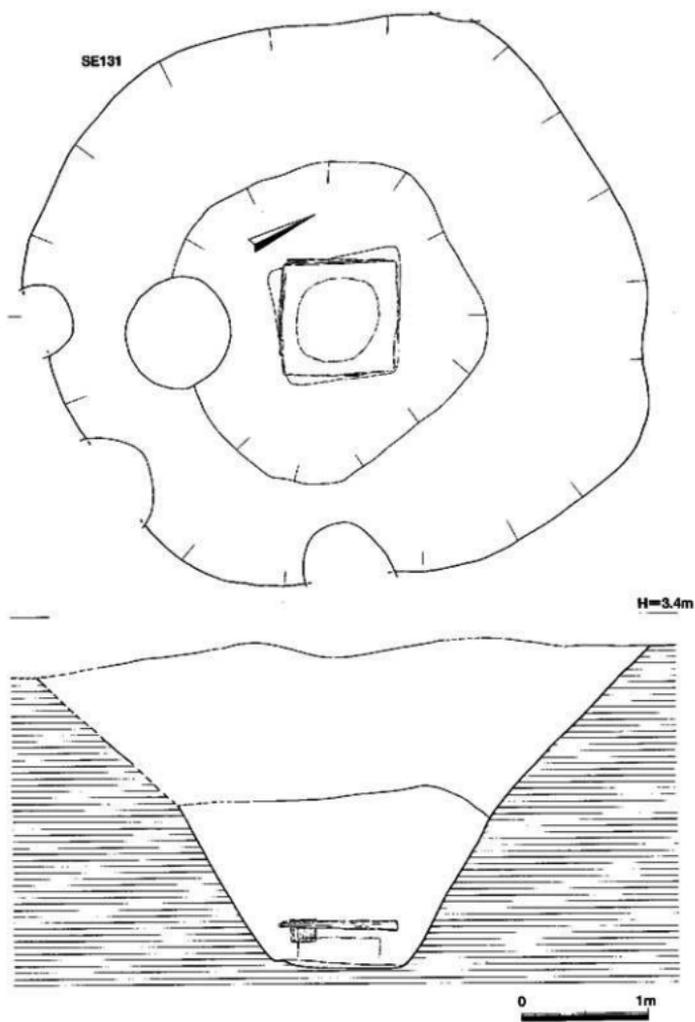
出土遺物（第19図80～83） 80・81は土師器小皿である。80は復元口径9.1cmを測り、外底部は回転ヘラ切りである。81は回転糸切り底で、復元口径は9.3cmである。なお、共に板状圧痕はない。82は復元口径15.8cmを測る土師器杯で、板状圧痕のない回転糸切り底である。83は同安窯系青磁の小碗で、外面には縦方向の櫛目文、内面には髷状工具およびヘラ状工具による施文を有する。高台の一部にまで施軸される。これらの出土遺物から12世紀中頃の遺構と考えられる。

SE131（第21図） A・B-2区で検出したSK151・153、SP154・186に切られる非戸である。平面プランは隅丸方形に近い円形を呈し、径4.6mを測る。壁面の中位に段を有し、そこから下位は傾斜が強くなる。検出面からの深さ2.6mを測る底面は一辺約1mの方形プランを呈する。覆土は褐色砂質土と暗黄褐色砂が互層をなす。底面上には厚さ2.5cm前後、幅約7cmの横機材を一辺約0.9mの方形に組み、その外側に幅約10cmの縦板材を並べた井筒の一部が確認できた。ただし、遺存状況は不良で、木質の腐食した痕跡にとどまる部分が多い。また、その内部には水溜と考えられる木質の腐食した径65～75cmの円形プランを検出した。木桶が土圧により歪んだものと推定される。なお、底面の標高は0.55mを測り、湧水しない。

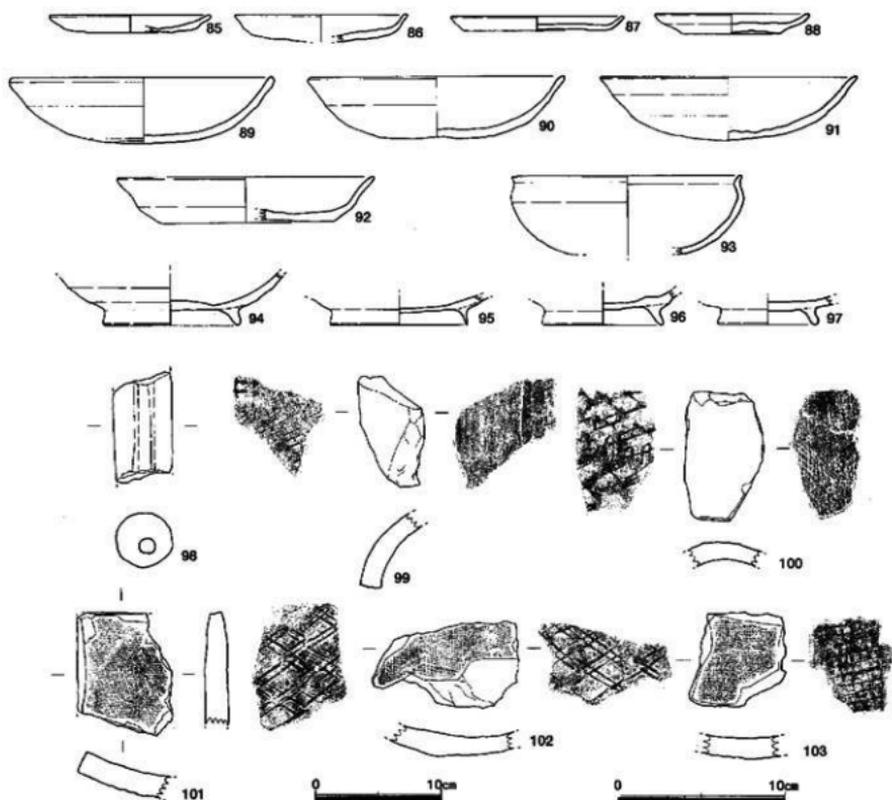
出土遺物（第22図） 85～88は土師器小皿である。85・86は回転ヘラ切り底で、共に板状圧痕を有する。86・87の外底部は回転糸切りで、87には板状圧痕が認められる。順に復元口径は9.5、10.2、10.2、8.2cmを測る。89～92は土師器杯で、復元口径は15.2～15.3cmを測る。89～91は回転ヘラ切り底の丸底杯である。いずれも板状圧痕はない。92は回転糸切り底で、板状圧痕を有する。93は混入した古墳時代の土師器鉢である。器面が著しく荒れる。94～97は土師器碗で、断面方形の低い高台を貼付する。94・95の外底部には回転ヘラ切り痕が残り、94には板状圧痕が認められる。98は筒形の管状土錘で、器面は丁寧にナデを施す。径3.5cm、孔径0.9cmを測る。99～103は瓦である。99・100は九瓦



第20図 SE128実測図（1/40）  
および出土遺物実測図  
（1/3）



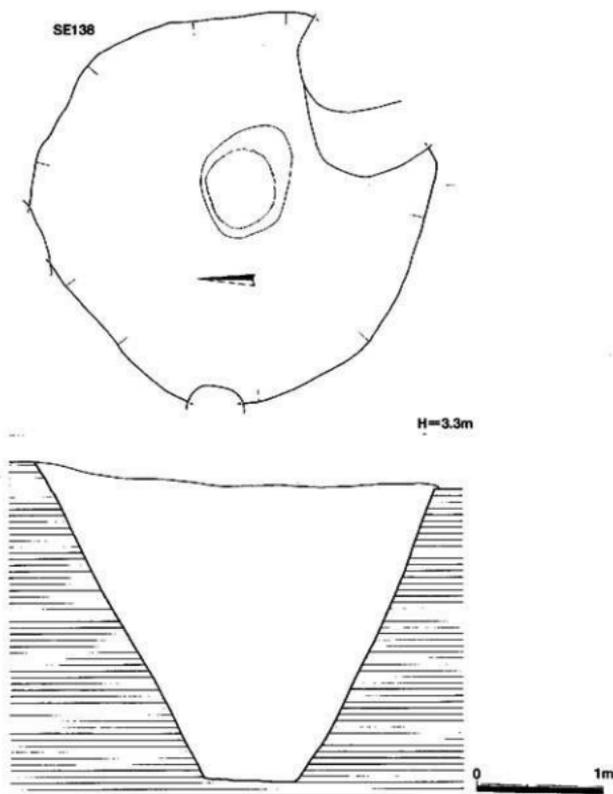
第21図 SE131実測図 (1/40)



第22図 SE131出土遺物実測図 (99~103は1/4、他は1/3)

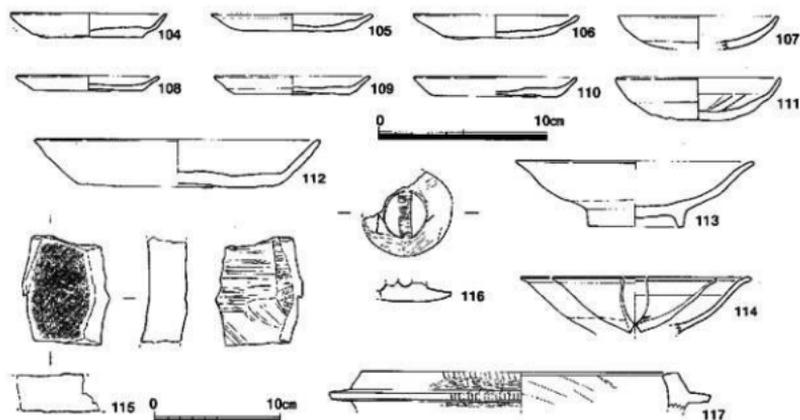
で、凸面には斜格子目叩き、凹面には布目が残る。99には文字銘入りの叩き板を用いているが、文字が側縁部にかかり一部しか確認し得ない。「井」であろうか。101~103は平瓦で、いずれも凹面には細かい布目が認められる。101・102は二重の斜格子目、103には格子目の叩きを施す。100・102は土師質、他は須恵質の焼成である。他に中国陶器、白磁、龍泉窯系青磁の細片が出土した。これらの出土遺物から12世紀中頃の井戸と考えられる。

SE138 (第23図) A-3区に位置し、SK132・137に切られる。平面プランは径3.1mの円形を呈する。上面から底面に一気にすぼみ、深さは2.6mを測る。覆土は褐色砂に黄褐色砂質土が混ざり、中央の井筒部分は暗褐色砂質土である。底面付近では木質の腐食した径約60cmの不整な円形プランを確認できた。底面の標高は0.5mを測り、湧水は認められなかった。



第23図 SE138実測図 (1/40)

出土遺物(第24図) 104~111は土師器小皿である。104~107は回転ヘラ切り底で、107を除いて板状圧痕を有する。復元口径は9.2~9.8cmを測る。108~111の外底部は回転糸切りで、復元口径は8.4~9.8cmを測る。111を除き板状圧痕が認められる。111は深みのある器形で、内面にコテ当て痕が残り、見込みを平滑に仕上げる。また、外底部にも丁寧なナデもしくは研磨を加えている。112は回転糸切り底の土師器杯で、復元口径は16.8cmを測る。幅広の板状圧痕を有する。113・114は白磁である。113は皿Ⅲ-2類で、底面において破片状態で出土したが、ほぼ完形に復元できた。外面下半は露胎である。114は碗Ⅵ-1・b類で、口縁部を緩く外反させる。内面には櫛状工具による施文を有する。外面下半には施軸されない。115は瓦質の埴で、厚さ3.1cmを測る。片面の一部には布目、一方には植物繊維状の圧痕が認められる。116は滑石製品で、径5.5cmを測る円盤状の下部に径2.8cmの円柱状の

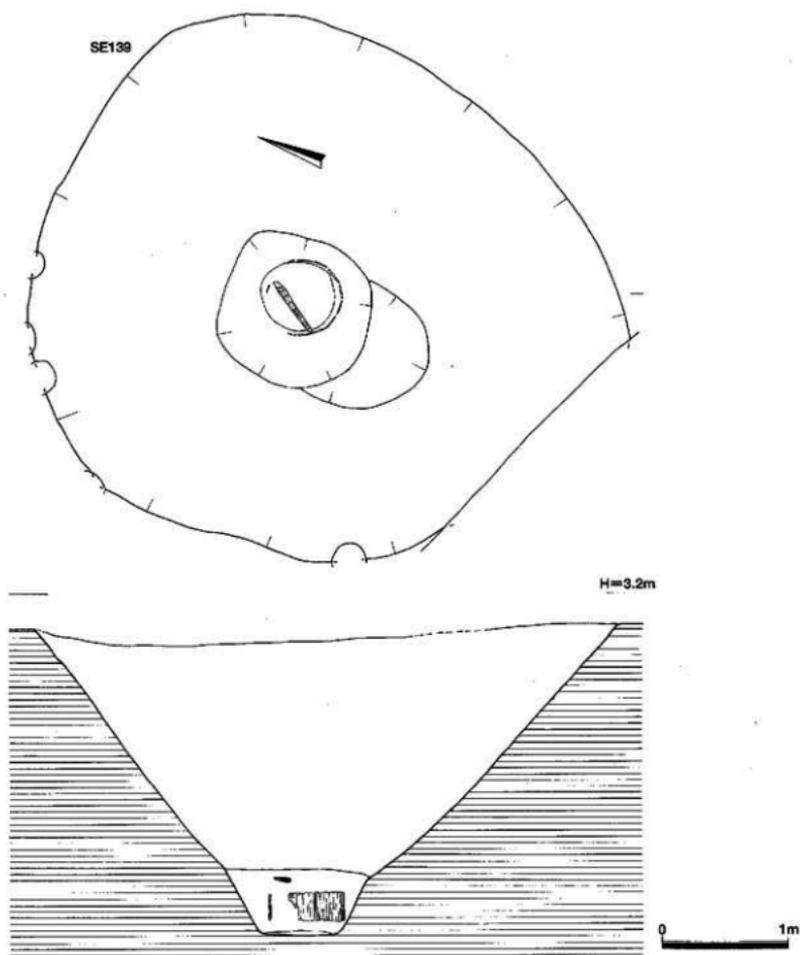


第24図 SE138出土遺物実測図 (115・117は1/4、他は1/3)

摘みを削り出すが、上半部は欠損している。摘みには径0.7cmを測る円形の経過の孔を有する。底面は凸レンズ状を呈し、煤の付着が著しい。117は滑石製石鍋で、外面にはノミの削痕を残す。口縁下には断面方形の鋸が巡る。内面には研磨を加えている。他に鉄製品や瓦の細片が出土した。以上の出土遺物から12世紀中頃の遺構に位置付けられる。

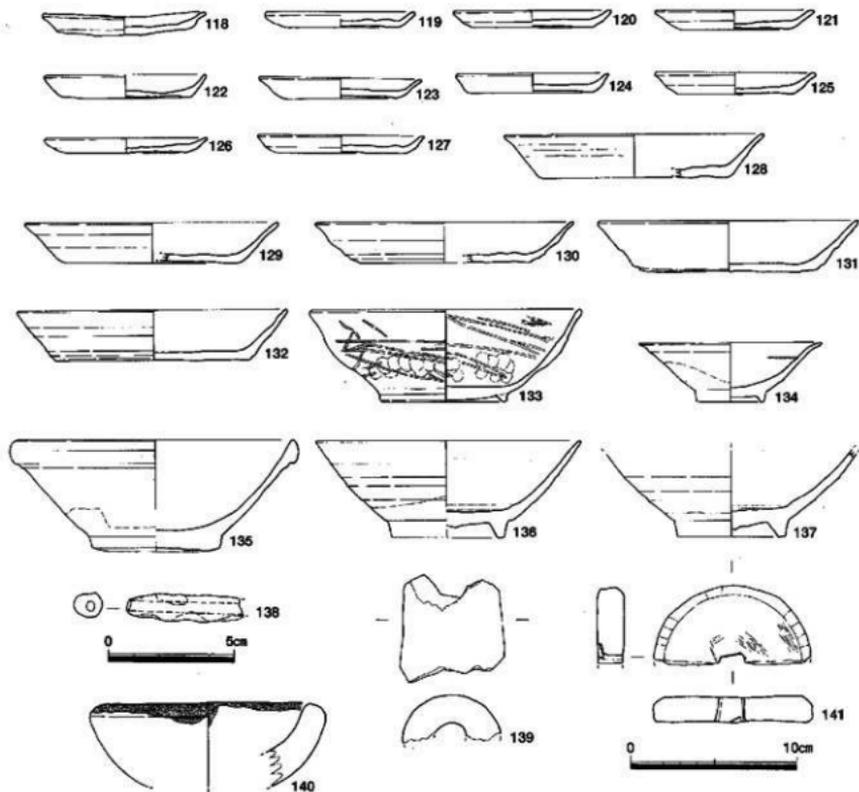
SE139 (第25図) A-3・4区の調査区南端で確認した井戸で、遺構の南端部が調査区外に位置する。現状での平面プランは不整な円形で、径4.1~4.5mを測る。覆土は褐色砂を主体とし、暗黄褐色砂がブロック状に混じる。壁面は上面から傾斜をもってすばみ、底面から約0.5m上位で直立気味に掘り込まれる。その掘り込み内の上層には長さ約50cmの自然木が横倒しの状態で確認できた。また、下層では幅10数cmの板材を用いた径約60cmと推定される木桶の一部が遺存していた。底面までの深さは2.5mを測り、標高は0.45mである。なお、湧水は認められなかった。

出土遺物 (第26図) 118~127は土師器小皿である。118は板状圧痕をもつ回転ヘラ切り底で、口径は9.6cmを測る。119~127の外底部は回転糸切りである。復元口径は8.8~9.8cmを測り、その平均は9.4cmである。なお、119~123には板状圧痕が認められる。128~132は回転糸切り底の土師器坏で、128を除いて板状圧痕を有する。これらの復元口径は15.0~16.0cmで、平均は15.4cmを測る。133は土師器碗で、断面台形の低い高台を貼付する。内外面にヘラ研磨を行うが、下半部には指オサエが残る。口縁部にはヨコナデを施す。134~137は白磁である。134は皿Ⅲ-2類で、内面の口縁下には沈線を有するが、一周しない。明オリブ灰色の釉が施されるが、外面上半部は露胎である。135は玉縁状の口縁部を呈する碗Ⅳ-1・a類で、やや赤味のある灰白色の胎土に濁った白色の釉がかけられる。内面には貫入が多く認められる。136・137は碗Ⅴ-2類で、見込みの軸を輪状にカキ取る。外面下半部は施釉されない。136の内面口縁下には細い沈線が1条巡る。138は紡錘形の管状上錘である。端部を欠損している。139は籬羽口片で、図上半部は二次的加熱により灰色に変色している。胎土には砂粒が多く含まれる。140は復元口径14.0cmを測る取瓶で、器面は加熱により灰色を呈する。口縁部上面から内面にかけては気泡状にガラス質化しており、僅かに緑錆の付着が認められる。141は円盤状



第25図 SE139実測図 (1/40)

の滑石製品で、径9.4cm、厚さ1.6cmを測る。中央部には一辺1.5cmの方形の孔を有する。全面をやや粗く研磨しているが、割縁部にはノミと考えられる細かい削痕が残る。舞い切式発火具の弾み車であろうか。他に須恵質土器や中国陶器の細片が出土している。以上の出土遺物から12世紀中頃の遺構と考えられる。

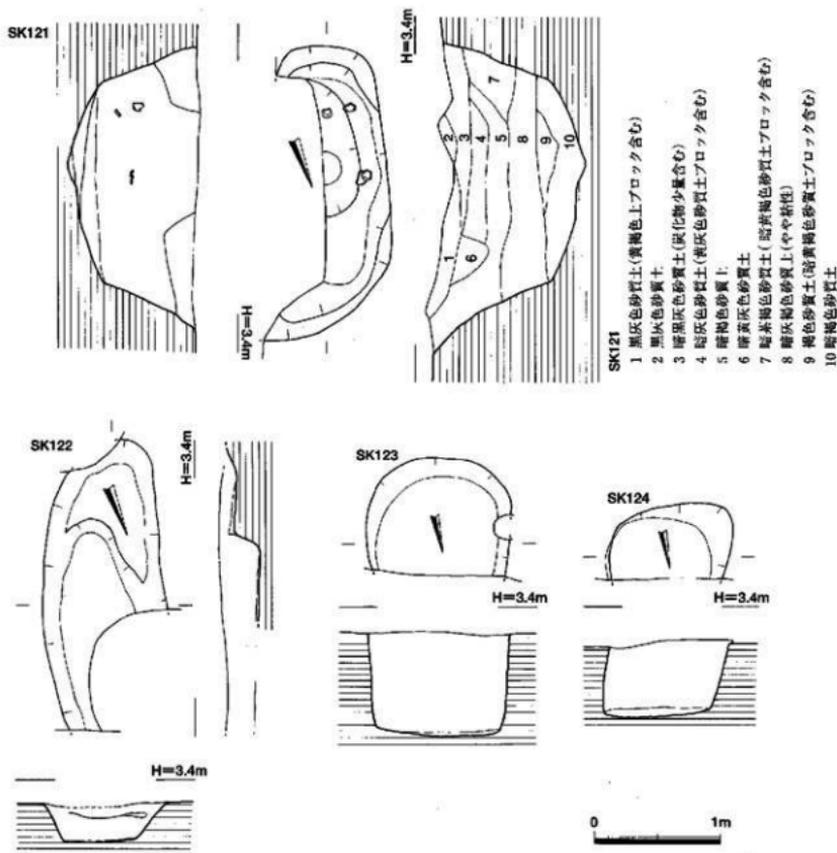


第26図 SE139出土遺物実測図 (138は1/2、他は1/3)

### (3) 土坑 (SK)

SK121 (第27図) 調査区北東端のB-1区に位置する。遺構の東側は調査区外に位置するため、全容は不明であるが、現況では、楕円形の平面プランを呈し、長径2.3m、深さ1mを測る。壁面の傾斜は急で、底面はピット状に浅く窪む。覆土中位には土師器、瓦器片が投棄されていた。

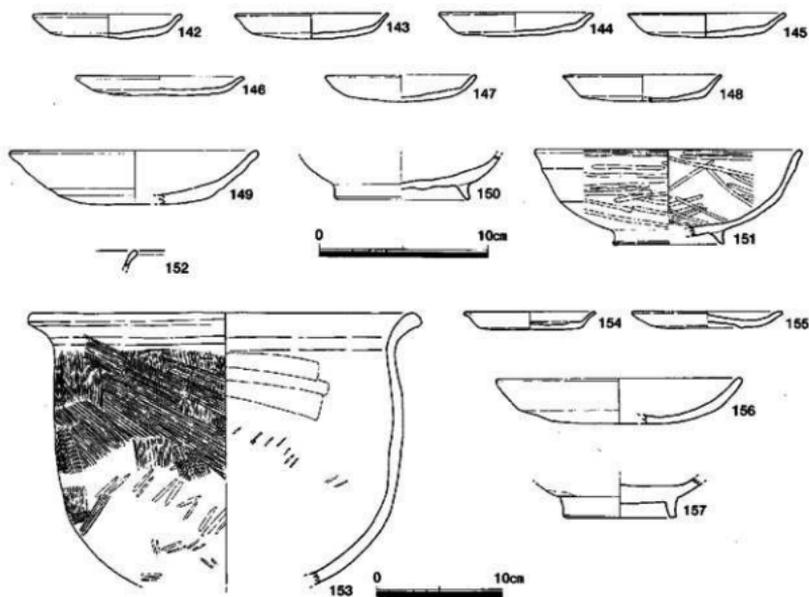
出土遺物 (第28図142~152) 142~148は回転ヘラ切り底の土師器小皿である。142~146には板状圧痕が認められる。復元口径は8.6~9.8cmを測り、平均は9.1cmである。149は復元口径14.4cmを測る土師器坏で、外底部は回転ヘラ切りである。板状圧痕はない。胎土には金雲母片を多量に含む。150は土師器碗である。外底部には回転ヘラ切り痕および板状圧痕を残す。151は瓦器碗である。体部の内外面にはヘラ研磨を施し、口縁部外面にはヨコナデを加える。152は緑釉陶器の口縁部細片である。内外面に施釉される。他に白磁、瓦等の細片が出土した。以上の出土遺物から12世紀前半の遺構と考えられる。



第27図 SK121・122・123・124実測図 (1/40)

**SK122** (第27図) A・B-1区で検出した。SK123・125に切られる溝状の土坑である。幅0.9mを測り、底面の南側にはテラスを有する。その北側は段落ちし、深さは0.25mである。覆土は茶褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第28図153) 遺構北東部の上面において出土した土師器甕である。なお、SK123覆土から出土した土器片も接合した。底部を除き、約1/2が遺存し、復元口径30.0cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は木目直交の粗い平行叩きを施し、上半部には縦および斜方向の刷毛目を加える。体部内面の上半は板状工具による横方向のナデ、下半はナデを行なうが、木目直交の平行当て具の痕跡が部分的に残る。外面上半には煤が付着する。他には土師器片が少量出土したにとどまる。



第28図 SK121・122・123出土遺物実測図 (153は1/4、他は1/3)

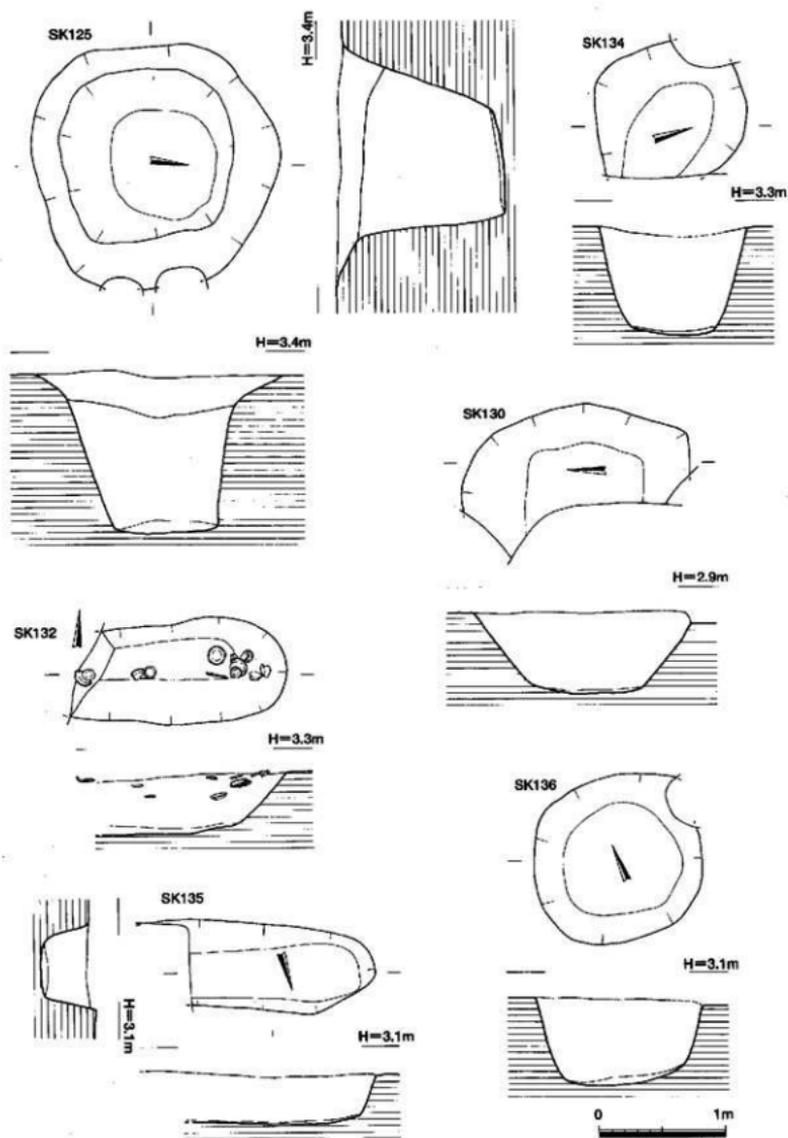
この遺物から10世紀後半～11世紀前半代の土坑と推定される。

**SK123** (第27図) 調査区北西端のA・B-1区に位置し、SC133、SK122を切る。遺構の北側は調査区外に延びるため、規模は不明であるが、現況で幅1.1m、深さ0.8mを測る。壁面は直立気味に立ち上がる。覆土は暗灰褐色砂質土を主体とする。

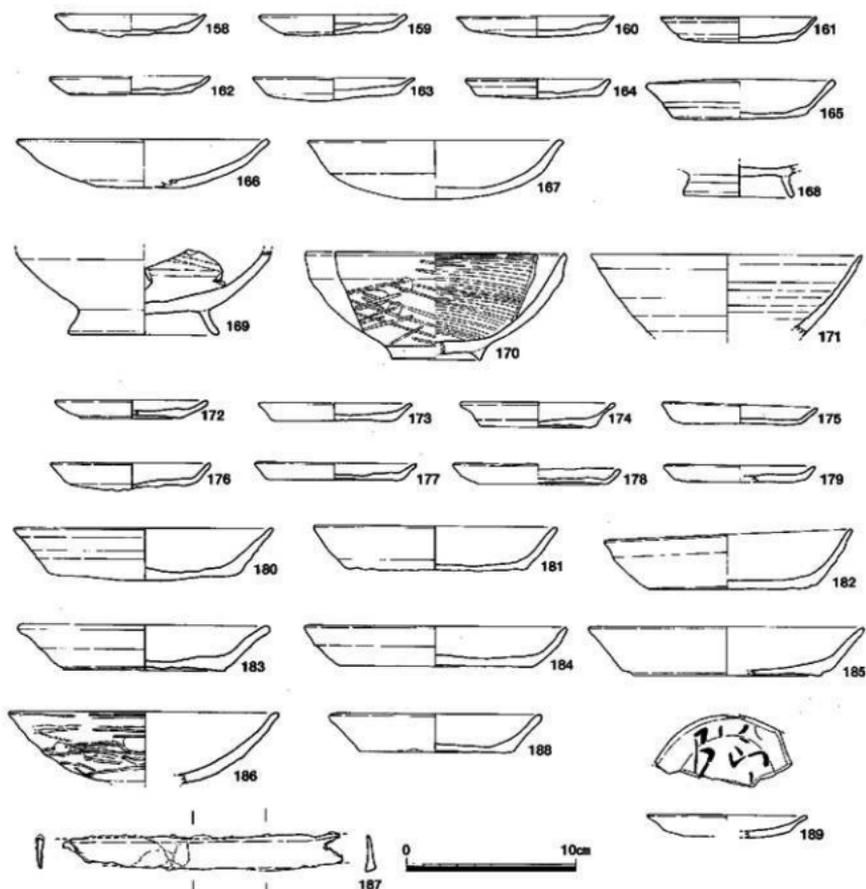
出土遺物(第28図154～157) 154・155は回転ヘラ切り底の土師器小皿で、155には板状圧痕が認められる。復元口径は順に7.4、8.8cmを測る。156は復元口径14.3cmを測る土師器杯である。外底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕を有する。157は白磁碗V類である。高台際まで釉が施される。見込みには段状の沈線が巡る。他に瓦器、鉄製品等の細片が出土している。以上から12世紀前半の遺構に属する。

**SK124** (第27図) 調査区北端のB-1区に位置し、SK123同様に遺構の北側は調査区外にある。現況で、幅0.9m、深さ0.6mを測る。壁面は直立して立ち上がり、東側ではオーバーハングする。覆土はやや粘性のある暗灰褐色砂質土を主体とする。出土遺物には、回転ヘラ切り底の土師器、白磁等があるが、いずれも細片である。

**SK125** (第29図) A・B-1区で確認したやや不整な円形の土坑で、径1.95mを測る。壁面の傾斜は、上位の段をもって変化しており、下半部は急である。覆土は暗灰褐色砂質土で、深さは1.25mを測る。

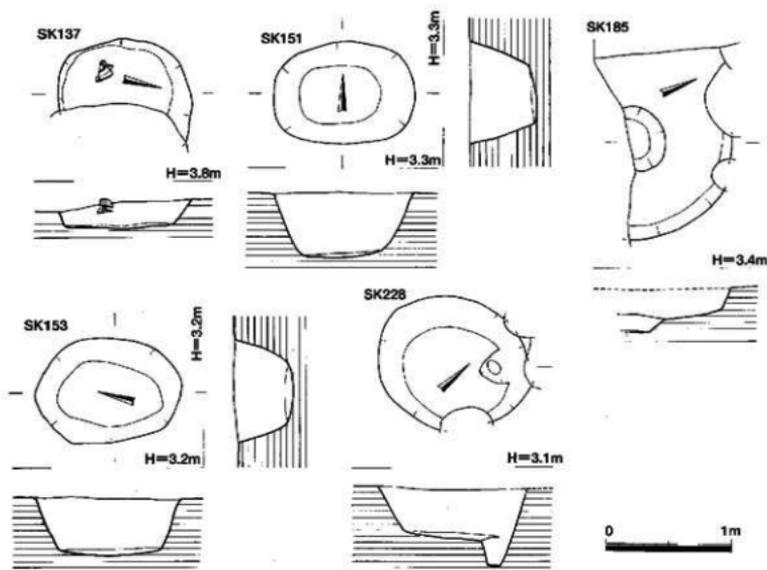


第29図 SK125・130・132・134・135・136実測図 (1/40)



第30図 SK125-132-134-136出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物(第30図158~171) 158~165は土師器小皿である。いずれも回転ヘラ切り底で、164・165を除き板状圧痕を有する。復元口径は8.7~10.8cmを測り、平均は9.2cmを測る。165は他の小皿に比して、口径・器高共に大きい個体である。また、見込みおよび外面の一部には、油質の付着が認められる。166・167は回転ヘラ切り底の土師器坏である。167は板状圧痕を有する。復元口径は順に14.6、14.8cmである。168は土師器椀で、比較的高い高台を貼付する。169は黑色土器A類椀で、外面はヨコナデ、内面にはヘラ研磨を施す。外底部には板状圧痕が残る。170は鏡内産楠葉型の瓦器鉢で、口縁部は体部から鈍く屈曲して、立ち上がる。口縁端部は尖り気味に納め、内面には浅い沈線が



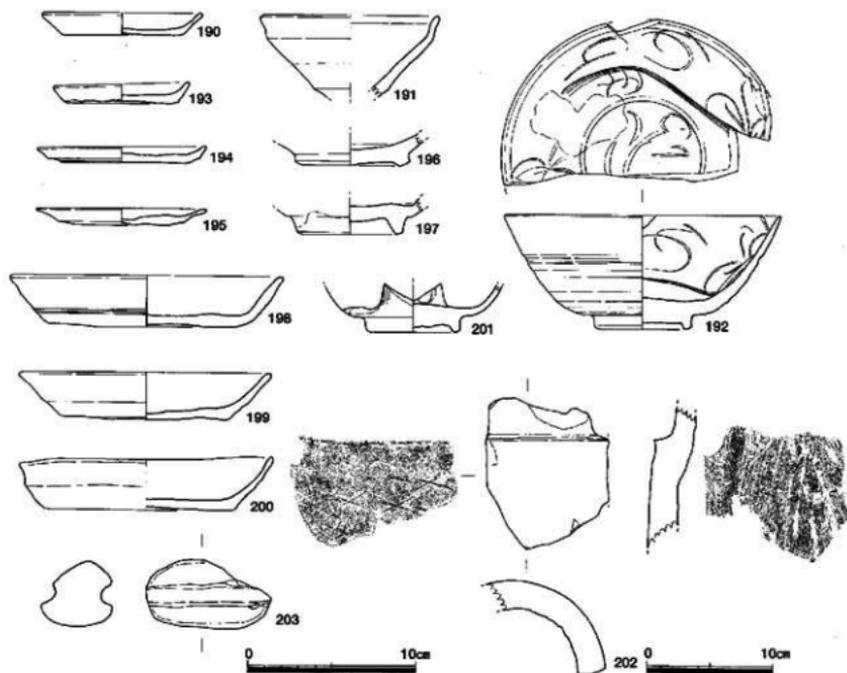
第31図 SK137・151・153・185・228実測図 (1/40)

巡る。底部には断面三角形の低い高台を貼付している。外面は暗文風にヘラ研磨を施し、体部内面には極めて密な研磨を行なう。また、見込みにはジグザグ状のヘラ研磨を加えている。171は初期高麗の青磁碗である。体部は直線的で、口縁端部は尖り気味に納める。釉は光沢の鈍いオリーブ灰色を呈する。他に白磁、瓦等の細片が出土している。以上の出土遺物より11世紀末から12世紀初頭の遺構と考えられる。

**SK130** (第29図) B-3区に位置し、東側をSE126・128・129に切られる。幅1.75m、深さ0.65mを測り、断面は逆台形を呈する。覆土は暗灰茶褐色砂質土で、暗黄褐色砂が混じる。出土遺物には回転ヘラ切り底の土師器、瓦器等があるが、いずれも細片である。

**SK132** (第29図) A-2・3区の調査区際で検出した溝状の土坑で、SE138を切る。西側は調査区外に延びる。幅0.85m、深さ0.45mを測り、逆台形の断面形を呈する。覆土は暗灰色砂質土で、やや粘性をおびる。主に上層から土師器を主体とする遺物が出土した。その出土状況から遺構埋没最終段階における投棄であると考えられる。

出土遺物 (第30図172~187) 172~179は土師器小皿である。いずれも回転糸切り底で、179を除き板状圧痕を有する。復元口径は9.0~9.9cmで、平均は9.3cmを測る。180~185は土師器杯である。180のみ回転ヘラ切り底で、他は回転糸切りである。いずれにも板状圧痕が認められる。復元口径は14.3~16.4cmを測り、平均は15.1cmである。186は瓦器碗である。口縁部をヨコナデ、体部外面にはヘラ研磨を施す。内面は器面の風化が進んでおり、調整は不明である。187は不明鉄製品で、錆化が進む。残存長16.5cm、幅2.0cmを測る。図上面は凹面を呈し、端部は部分的に面を有する。これらの出土遺



第32図 SK137・151・153・185・228出土遺物実測図 (202は1/4、他は1/3)

物から12世紀中頃の遺構と考えられる。

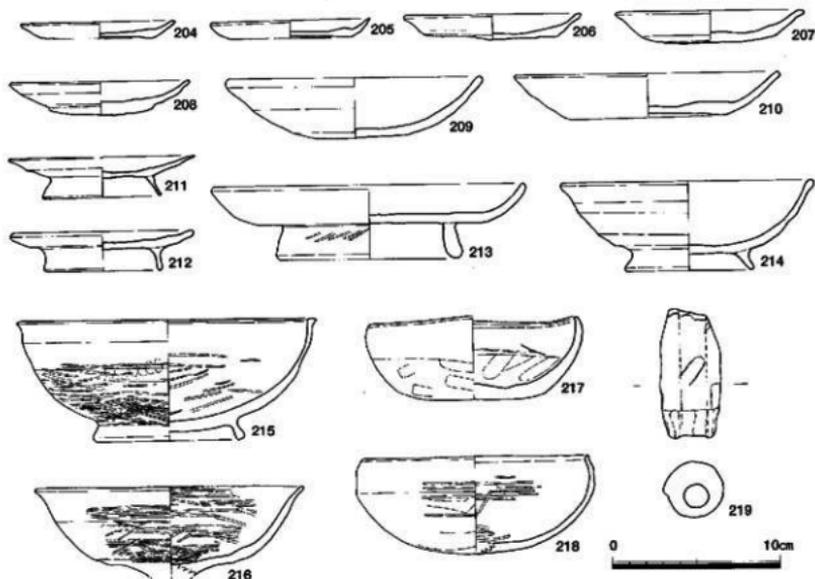
**SK134** (第29図) B-2区の調査区際で確認した。東側は調査区外に位置するが、径約1.3mの円形もしくは楕円形の平面プランを呈するものと考えられる。壁面の傾斜は急で、深さは0.75mを測る。覆土はやや粘性のある暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第30図188) 復元口径12.6cmを測る土師器杯である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。他に回転ヘラ切り底の土師器、中国陶器、瓦等が出土しているが、いずれも細片である。12世紀中頃の遺構と推定される。

**SK135** (第29図) B-2区に位置し、SK136を切る土坑である。東側をコンクリート基礎に攪乱される。溝状に東西方向に長く、幅0.7m、深さ0.4mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。覆土は暗灰褐色砂質土を主体とする。出土遺物には土師器、中国陶器、白磁等があるが、いずれも細片である。

**SK136** (第29図) B-2区で検出した円形の土坑で、SK135に切られる。径1.4m、深さ0.7mを測り、底面は緩く西側に傾斜する。覆土は黒褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第30図189) 回転ヘラ切り底の土師器小皿で、復元口径は9.6cmを測る。内面には墨書



第33図 ビット・遺構検出時出土遺物実測図 (1/3)

を有するが、文字は不明である。他に格子目押きの瓦片が出土している。

SK137 (第31図) A-3区に位置し、SE138を切る。東側は攪乱されている。現況で、径約1mの円形土坑と推定される。深さは0.2mで、断面は逆台形を呈する。覆土はやや粘性のある黒褐色砂質土を主体とする。

出土遺物 (第32図190~191) いずれも上層出土である。190は板状汗痕を有する回転糸切り底の土師器小皿で、復元口径は9.0cmを測る。191は黒釉磁器の天目碗で、口縁部は外湾気味に立ち上がる。釉は内面および外面の上半に施され、部分的に茶褐色に発色する。胎土は淡茶褐色を呈する。192は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類である。体部内面および見込みに片彫り、櫛状工具により草花文を施す。釉は部分的に曇付きまでかけられる。他に回転ヘラ切り底の土師器細片が出土している。以上から12世紀中頃の遺構に位置付けられる。

SK151 (第31図) B-2区で検出した隅丸方形の土坑で、SE131を切る。長さ1.1m、幅0.8m、深さ0.5mを測る。断面は逆台形を呈し、覆土は淡灰茶褐色砂質土を主体とする。

出土遺物 (第32図193~197) 193~195は土師器小皿で、193は回転糸切り底、194・195は回転ヘラ切りである。194を除いて板状汗痕を有する。復元口径は順に、7.8、9.7、9.8cmである。196・197は白磁の底部片である。196は碗Ⅳ類で、胎土はにぶい橙色を呈する。197は碗Ⅴ類で、見込みの釉を輪状にカキ取る。他に中国陶器、瓦等の細片が出土している。これらの出土遺物から12世紀中頃の遺構と考えられる。

**SK153** (第31図) B-2区に位置し、SE13を切る。不整形円形を呈し、長径1.15m、短径0.8mを測る。深さは0.45mを測り、断面は逆台形を呈する。覆土は淡灰茶褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第32図198~201) 198~200は土師器坏で、いずれも回転糸切り底で、板状匠痕を有する。口径は順に、16.1、14.8、14.9cmを測る。201は龍泉窯系青磁碗である。体部の遺存状態は不良であるが、外面には樹歯文、内面には片彫りによる文様が施される。碗I-6類であろう。他に瓦片が出土した。以上の出土遺物から12世紀後半から13世紀初頭の遺構と考えられる。

**SK185** (第31図) A-1区の調査区際で検出した土坑で、南側は調査区外に延びる。また、西側は擾乱され、北側もピットに切られるため、遺構の遺存状況は悪い。深さ0.25mを測り、壁面際にはピット状の張り込みを有する。覆土は茶褐色砂質土である。

出土遺物(第32図202) 丸瓦である。凸面側には斜格子目の叩きを施すが、土縁部から胴部先端にはヨコナデを加えている。凹面にはよれた布目と縄紐痕が残る。他に土師器の細片が少量出土している。

**SK228** (第31図) B-2区で確認した円形の土坑である。径1.05~1.15m、深さ0.4mを測る。北東側の壁面際には底面からの深さ0.2mのピットを有する。覆土は淡灰茶褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第32図203) 土師製の有溝土鏝で、一部を欠損する。長さ7.7cm、溝幅1.2cmを測る。器面は丁寧なナデを施す。他に土師器、瓦の細片が出土した。

#### (4) その他の遺物(第33図)

ここでは2区のピットおよび遺構検出時出土遺物の一部をとりまとめて報告する。

204~208は土師器小皿である。順に出土遺物は、B-2区 SP154、A-2区 SP355、A-3区 SP375、A-3区 SP330、B-1区 SP265である。204・205は回転糸切り底、他は回転ヘラ切り底である。209(B-1区 SP200)・210(B-1区 SP268)は土師器坏である。209の外底部は回転ヘラ切りで、内面をこてあてにより平滑に仕上げる。210は回転糸切りである。211(B-3区 SP281)・212(A-3区 SP329)は土師器小皿である。211は薄い器壁をもち、堅緻に焼成する。外方に開く高台を有し、外底部には回転ヘラ切り痕が残る。212の高台は直立気味で、外底部にはヨコナデがおよぶが、回転ヘラ切りの痕跡が僅かに残る。213は復元口径18.6cmを測る土師器坏で、B-2・3区 SP282出土である。器壁の厚い高台を貼付する。214はA-1・2区 SP186出土の土師器碗である。外底部にはヨコナデを施すが、回転ヘラ切り痕が残る。215は遺構検出時に出土した畿内産和泉型の瓦器碗である。口縁部は僅かに外反し、ヨコナデを加える。端部は面を形成している。外面はヘラ研磨により光沢がみられる。内面もヘラ研磨を行なうが、器面の風化が進み、不明瞭である。高台は比較的高く、外方に張り出す。216~218は古墳時代の土師器である。216はA-3区 SP316出土の高坏の坏部で、下半に鈍い屈曲を有する。内外面に丁寧な横方向のヘラ研磨を施し、口縁部および脚部との境界にはヨコナデを加える。色調は赤褐色を呈する。217・218は鉢である。217はA-1区 SP168出土で、口縁部は内湾して、尖り気味に納める。外面下半にヘラ削りを行い、底部を平坦に仕上げる。218は薄い器壁をもち、ヘラ研磨を施す。口縁部内外面にはヨコナデを加える。B-1・2区 SP203出土である。219は遺構検出時出土の管状土鏝で、両端部は欠損する。紡錘形を呈し、径3.4~3.6cm、孔径1.4cmを測る。

## 4. 3区の調査

### 1) 概要

3区は箱崎1丁目4番地内に所在し、箱崎遺跡の中央東端に位置する。調査前の状況はJR鹿児島本線と共同住宅に挟まれた南北方向に狭長な平地であった。

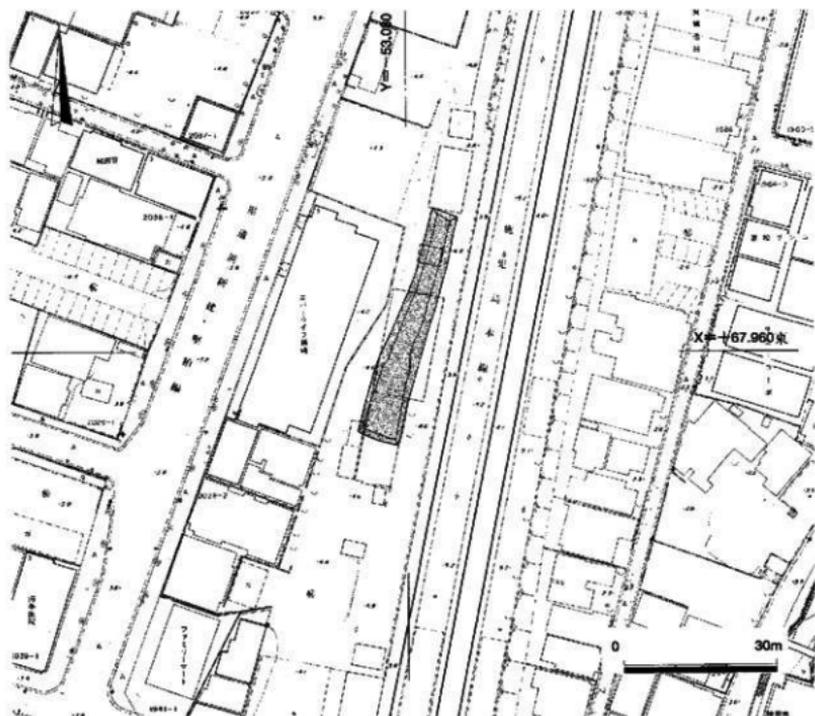
本区の調査は砂丘基盤である黄褐色砂上面で行った。砂丘面の標高は、北側で2.7~2.9m、南側で2.5~2.6mを測り、南側に緩く傾斜している。検出した遺構は中世の井戸、土坑、溝等で、1・2区と異なり古墳時代の遺構は認められなかった。なお、調査区が狭長なため、全容が判明する遺構が少ない。また、調査区の北西部には石炭ガラを廃棄した大規模な攪乱が認められた。

本区の調査は、2区の埋め戻しと並行して平成12(2000)年3月1日、重機による表土剥ぎ取りから始めた。その重機作業終了後の同月6日から人力作業を開始し、遺構の掘削が終了した同月28日に全景写真を撮影した。翌日から重機による埋め戻しを行い、同月31日の器材撤収をもって3区の調査を完了した。本調査区の調査面積は、328㎡である。

### 2) 遺構と遺物

#### (1) 井戸 (SE)

4基を確認したが、いずれも東側調査区壁面にかかっており、全掘し得なかった。



第34図 3区調査区位置図 (1/1,000)

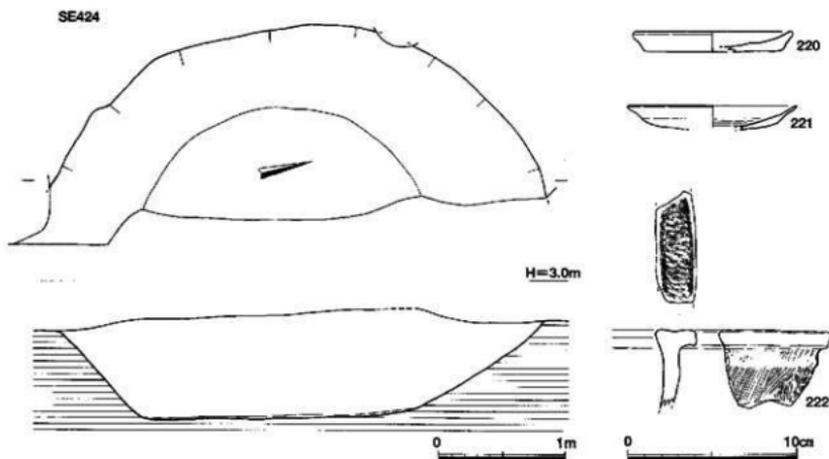
SE424 (第35図) A・B-4・5区に位置し、現況からは、径約4mの円形プランを復元できる。調査区内では深さ0.8mを確認できたが、更に傾斜するものと推定される。覆土は灰茶褐色砂質土に黄褐色砂ブロックが混じる。

出土遺物(第35図) いずれも小片である。220・221は土師器小皿である。220は板状圧痕を有する回転糸切り底で、復元口径9.2cmを測る。221は回転ヘラ切り底で、板状圧痕はない。復元口径は10.1cmである。222は「L」状の口縁部を呈する土師質鍋で、上面には縄状の圧痕が認められる。口縁部および体部内面はヨコナデ、外面には刷毛目調整を施す。他に白磁、同安窯系青磁等の細片が出土している。これらから12世紀中頃の遺構と推定される。

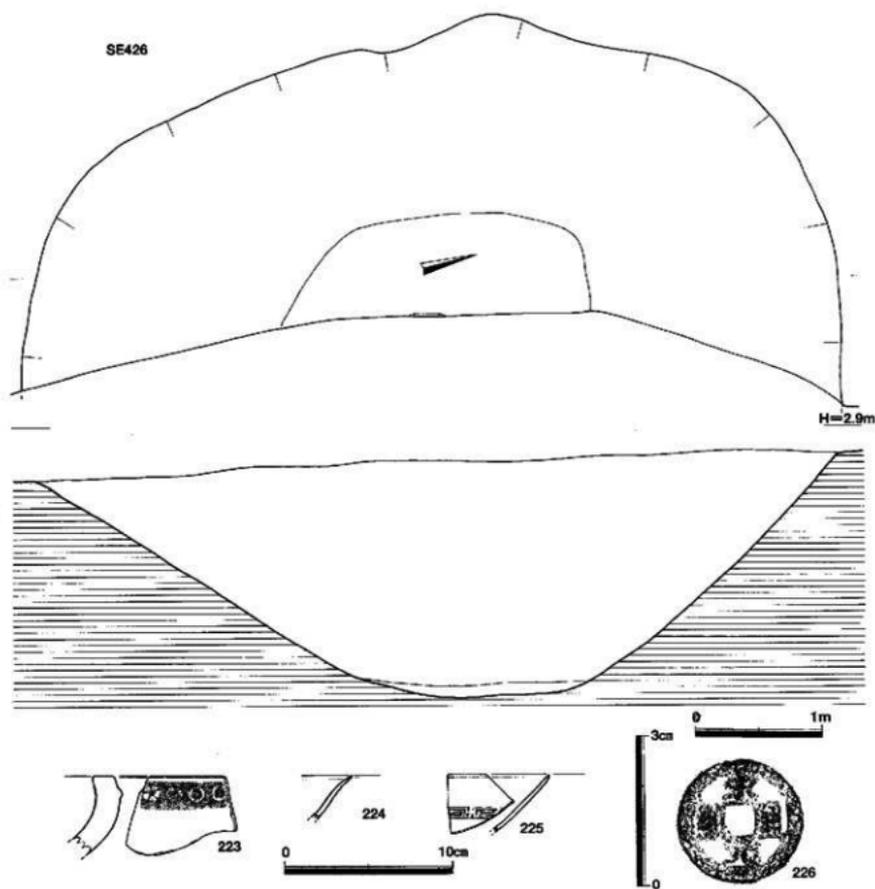
SE426 (第36図) A・B-3・4区で確認した井戸で、径6m以上と推定される規模の大きな掘り方を有する。検出面からの深さ1.9mで平坦面を確認し、壁面際では木桶と考えられる痕跡を検出したが、大半は調査区外に位置している。覆土は上層が茶褐色砂質土、下層には暗黄褐色砂が互層に混じる。

出土遺物(第36図) 223は土師質火舎で、内湾して口縁部が立ち上がる。外面には菊花文および珠浮文のスタンプが施される。器面は風化する。224・225は口縁部1片の白磁碗口類で、共に青味を帯びた白色の釉が施される。225の内面には型押しによる雷文を配している。口縁部の露胎部分は赤褐色に発色する。226は北宋代の銅銭「宋元通寶」(初鑄年:960年)である。他の土師器、中国陶器、龍泉窯系青磁、瓦等の細片が出土した。以上の出土遺物から13世紀後半から14世紀初頭の井戸と考えられる。

SE428 (第37図) B-1区で検出した。径約3.3mを測り、検出面からの深さ1.6mに平坦面を設け、その北端部に井筒の下部を据える径約0.9mの円形の掘り込みを有する。その上面では径0.6mを測る木質の腐食した痕跡を確認し得たが、木桶等の水溜は遺存していなかった。覆土は黒灰褐色砂質土に黄褐色砂が混じり、下層では井筒の痕跡と推定される灰褐色粘性砂質土の円形プランが確認できた。底面の標高は0.5mを測り、湧水しない。

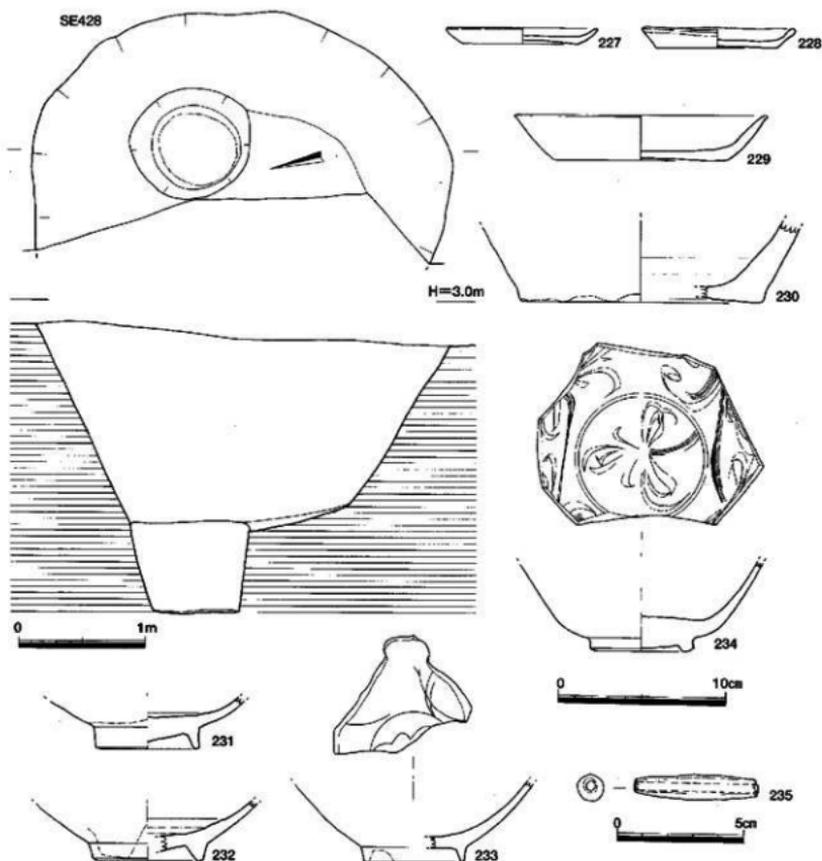


第35図 SE424実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)



第36図 SE426実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (226は1/1、他は1/3)

出上遺物(第37図) 227・228は土師器小皿である。共に口径9.0cmで、板状圧痕を有する回転糸切り底である。完形に近い個体である。229は復元口径15.0cmを測る土師器坏である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。230は中国陶器の甑底部である。胎土は灰褐色を呈し、外底部は赤褐色をなす。オリーブ灰色の釉が外底部を除いて施される。231～233は白磁碗である。231は碗V類で、見込みに段状の沈線が巡る。高台には施釉されない。232は碗Ⅳ類で、見込みの釉を輪状にカキ取っている。高台の一部に釉が垂れる。器面にはピンホールが多く認められる。233は碗Ⅳ類である。見込みに沈線を配し、ヘラ状工具による草花文を描く。高台まで釉がおよぶ。234は龍泉窯



第37図 SE428実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (235は1/2、他は1/3)

系青磁碗 I - 2 類である。内面と見込みに片彫りおよび櫛状工具による草花文を描く。釉は光沢のある淡緑色を呈し、疊付きの一部にまで釉がかかる。235は紡錘形の管状上鐙で、端部を僅かに欠損する。長さ4.9cm、径1.0cmを測る。他に須恵質土器、瓦等が出土した。以上の出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。

SE429 (第38図) 調査区の北東端で確認した。現況からは、径3.6mの井戸に復元できる。壁面の中位に段を有し、傾斜が強くなるが、東側は調査区外に位置しているため、深さや井筒の構造は不明である。覆土は淡褐色砂質土を主体とし、暗黄褐色砂が互層に混じる。

出土遺物(第38図) 236は復元口径9.0cmを測る土師器小皿である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。237は白磁碗V類である。灰白色の釉が高台の一部にかかる。他に白磁碗IV類、瓦等の細片が少量出土した。これらから12世紀後半の井戸と推定される。

## (2) 土坑 (SK)

**SK421** (第39図) 調査区の南端、A・B-5区に位置する。壁面の西側を攪乱に、また、東側をSD427に切れ、南側は調査区外に延びる。現況では、幅1.65m、深さ0.8mを測り、断面は逆台形を呈する。

出土遺物(第40図238~242) いずれも土師器で、238は口径9.2cmを測る回転ヘラ切り底の小皿である。板状圧痕を有する。239~242は坏である。いずれも回転糸切り底で、239のみ板状圧痕が認められる。復元口径は12.4~13.6cmを測り、平均は13.3cmである。他に白磁、青磁、滑石製品等の細片が出土した。

**SK422** (第39図) A・B-5区で検出した。東側をSD427に、西側を攪乱に切られる。現況では、径1.2m以上の円形もしくは楕円形を呈するものと推定され、底面に向かって漏斗状にすぼむ。北東部の壁面中位に小規模な平坦面を有し、深さは1.3mを測る。覆土は灰茶褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第40図243~244) 共に回転ヘラ切り底の土師器小皿で、板状圧痕を有する。復元口径は順に9.6、10.2cmである。244は完形に近い個体で、上層から出土した。他に白磁、同安窯系青磁碗、瓦等の細片が出土している。以上から12世紀中頃の遺構に位置付けられる。

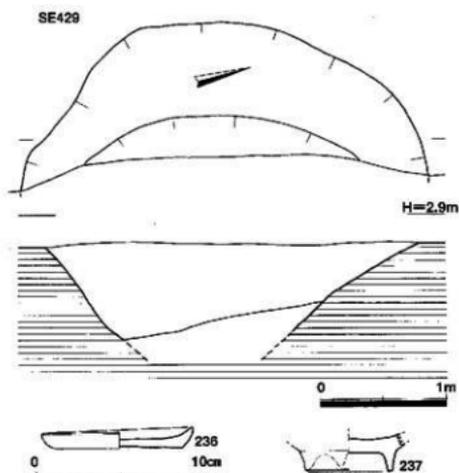
**SK423** (第39図) A・B-5区、SK422の北側で確認した。西側は攪乱されるが、径1.4m前後の円形プランを呈すると考えられる。断面は漏斗状で、深さは1.0mを測る。覆土は淡灰茶褐色砂質土である。出土遺物はいずれも細片で、回転糸切り・ヘラ切り底の土師器、瓦器、白磁等が少量ある。

**SK425** (第39図) A-4区の調査区西側に位置し、西側は調査区外に延びる。現況で、幅1.6m、深さ0.55mを測る。断面は逆台形を呈し、覆土は粘性の強い暗灰茶褐色砂質土を主体とする。出土遺物には回転糸切り底の土師器、白磁皿Ⅹ類等があるが、いずれも細片である。

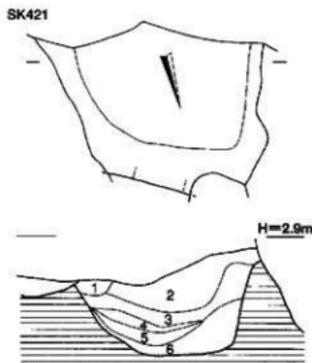
**SK518** (第39図) A-3区で検出した不整形方形プランの土坑である。長さ1.35m、幅1.2mを測る。断面は逆台形をなし、深さは0.45mである。覆土はやや粘性のある暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第40図245) 復元口径9.4cmを測る土師器小皿で、外底部は細かい板状圧痕を有する回転ヘラ切りである。他に土師器碗の細片が少量出土している。12世紀前半から中頃の遺構と推定される。

**SK599** (第39図) A・B-2に位置する長方形プランの土坑である。北東コーナーをSP530に切られ、西側は攪乱をうける。幅0.65m、長さ1.2m以上、深さ0.4mを測る。断面は逆台形を呈し、底面

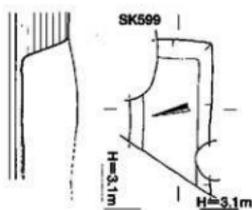
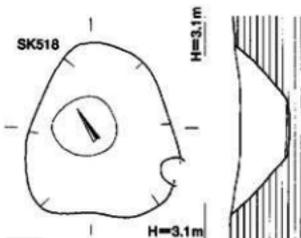
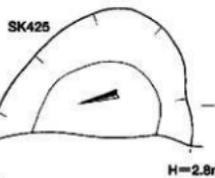
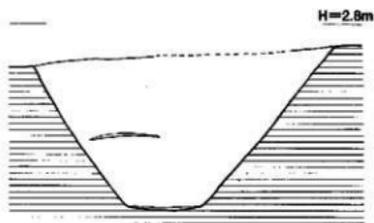
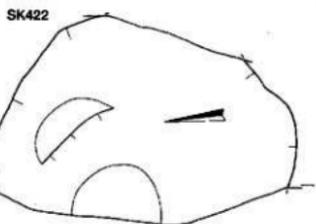
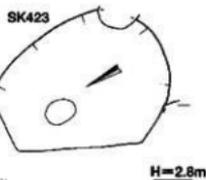


第38図 SE429実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)



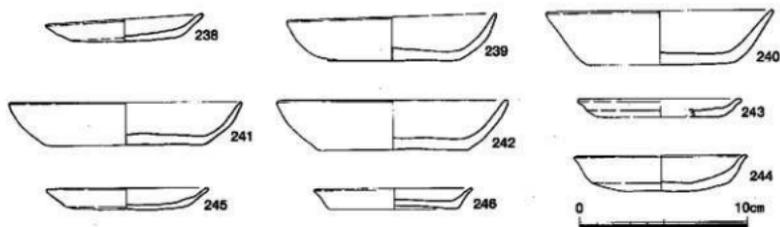
SK421

- 1 暗茶褐色砂質土
- 2 黄灰色砂
- 3 黒灰色土
- 4 黄褐色砂
- (黒灰色ブロック含む)
- 5 灰茶褐色土
- 6 暗黄灰色砂質土
- (灰茶褐色砂質土ブロック含む)



0 1m

第39図 SK421・422・423・425・518・599実測図 (1/40)



第40図 SK421・422・518・599出土遺物実測図 (1/3)

には数個の角礫が認められた。覆土は暗灰褐色砂質土である。

出土遺物(第40図246) 復元口径9.4cmを測る土師器小皿である。回転糸切り底で、板状圧痕が認められる。他に出土遺物はない。12世紀後半の遺構であろう。

### (3) 溝(SD)

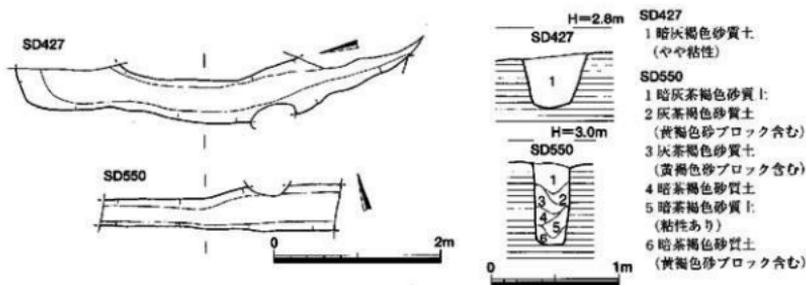
SD427(第41図) B-5区、調査区の南東端で検出した南北方向の溝状遺構で、SK421・422を切る。両端部共に調査区外に延びている。現況では、北側は緩く東側に折れている。幅0.5m前後で、深さ0.3~0.4mを測る。断面は逆台形を呈する。出土遺物には回転糸切り底の土師器、白磁等があるが、いずれも細片である。

SD550(第41図) A・B-2区に位置する。調査区を東西方向に横断する溝で、両端部は調査区外に延長する。幅0.3~0.55m、深さは0.5~0.65mを測る。回転糸切り底の上師器、瓦等が出土しているが、いずれも細片である。

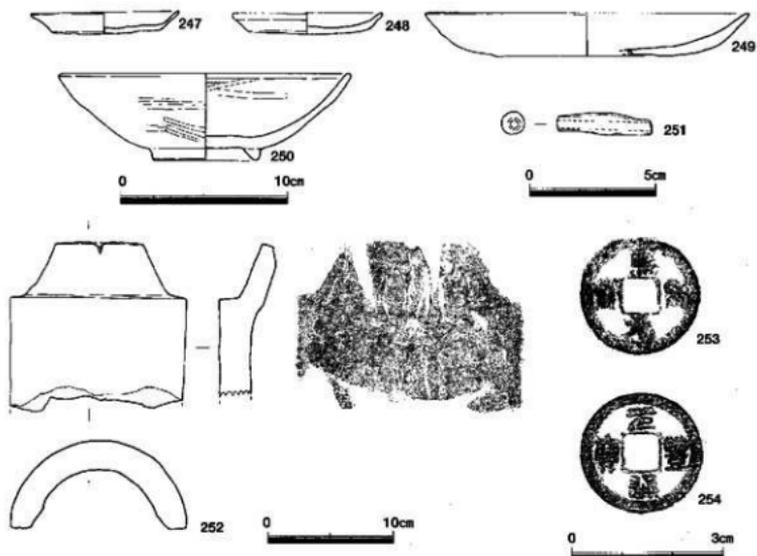
### (4) その他の遺物(第42図)

ここでは3区のピットおよび遺構検出時出土遺物の一部をとりまとめて報告する。

247~249はA-3区SP500から出土した土師器で、いずれも回転ヘラ切り底である。247・248は共に板状圧痕を有する完形の皿で、口径は順に8.7、8.9cmを測る。249は坏で、復元口径は19.2cmである。外底部に板状圧痕はない。250はA・B-3区SP516出土の瓦器碗で、断面台形の低い高台を貼付する。内外面をヘラ研磨し、平滑に仕上げる。口縁部および外底部にはヨコナデを加える。251は



第41図 SD427・550実測図(断面図は1/40、平面図は1/60)



第42図 ビット・遺構検出時出土遺物実測図 (253・254は1/1、251は1/2、252は1/4、他は1/3)

Λ-3区SP499から出土した紡錘形の管状土錘である。完形品で、長さ4.9cm、径1.1cm、重量2.5gを測る。252は遺構検出時出土の丸瓦である。須恵質の焼成で、凸面胴部には縄目叩きの痕跡が僅かに残るが、丁寧にナデ消している。凹面には布目を残し、側縁部は幅広のヘラ削りが施される。253・254は銅銭である。253はA・B-2区SP530出土である。鑄化が進むが、北宋代の「熙寧元寶」(初鑄年:1068年)と考えられる。254は遺構検出時出土で、北宋代の「元豊通寶」(初鑄年:1078年)である。

## IV. 結 語

今回の調査で確認した遺構は、古墳時代および中世の2時期に大別することができる。ここでは各時代別に主要遺構の時期的変遷や他調査区との関連性についてまとめを行ないたい。

### 〈古墳時代〉

該期の主な遺構としては、1区 SC025、2区 SC133・SC140の竪穴住居が挙げられる。SC025は布留式併行の竪穴住居で、1区の北東近接地で実施された第8次調査でも同時期の竪穴住居や土坑が検出されており、小規模ながら集落を形成していたものと考えられる。また、本報告であるが、遺跡南東側の第22次調査4区および第26次調査6区においても該期の遺構が確認されており、古墳時代前期の小集落が砂丘東側緩斜面に点在していたものと推測される。また、SC133・SC140は5世紀後半から6世紀前半に位置付けられ、当該期の遺構の確認は本遺跡内では最初の事例である。SC133からは滑石製品の未製品が出土しており、注日される。また、第30次調査16区でも6世紀代の遺構が確認されていることから、前期同様の立地に小規模な集落の存在が推定される。

### 〈中世〉

本文中で記述した個別の遺構時期および以下で用いる時期区分は山本信夫氏の土師器および輸入磁器の編年観<sup>1)</sup>を参照した。今回の検出遺構は10世紀後半から11世紀前半(1期)およびやや時期を経て12世紀前半から14世紀初頭にわたっており、後半の時期は以下の5期に細分することが可能である。土師器法量変遷を基軸として、土師器の外底部の切り離しが回転ヘラ切りのみで、白磁の出土頻度が極めて高く、初期高麗青磁を含む時期をⅡ期(12世紀前半)、土師器の外底部の切り離しに回転ヘラ切りおよび回転糸切りの双方が認められ、白磁の出土頻度が高い時期をⅢ期(12世紀中頃)、続いて土師器は回転糸切り底のみとなり、龍泉窯系青磁Ⅰ類(1-5類除く)や同安窯系青磁が主体となるⅣ期(12世紀後半)、龍泉窯系青磁Ⅰ-5類が主体を占め、龍泉窯系青磁Ⅲ類や白磁Ⅳ類を含まないⅤ期(13世紀初頭から前半)、前述の龍泉窯系青磁Ⅲ類や白磁Ⅳ類が主体となるⅥ期(13世紀中頃から14世紀初頭)と区分する。

I期の遺構は2区 SK122のみで、遺跡内での該期の報告事例も少数であるが、最近、第22次・26次・30次調査では筑崎宮創建時期に近い10世紀代の遺構が確認されている。詳細は今後の報告をまって検討していきたい。Ⅱ期以降には遺構数が一定量確認され、集落の定型化が伺われる。1区 SE023、2区 SK121・SK123・SK125等が挙げられるが、3区では未検出である。SE023は水溜に曲物を用いた横棧組の井戸で、Ⅲ期以降には殆ど見られないタイプである。なお、SK125からは初期高麗青磁が、SE023・SK125からは畿内型瓦器碗が出土している。Ⅲ期には約半数の遺構が該当し、主な遺構としては、1区 SE022・SE024・SK017、2区 SE131・SE138・SE139・SK132・SK137、3区 SE424・SK422等がある。井戸の水溜はいずれも木桶で、SE131のみに横棧材を用いた井側を組むが、該期以降は桶組の井側が主流となる。1区 SX020は出土遺物が稀少であるが、当期もしくはⅣ期の所産と考えられる。なお、SK017からは高麗陶器が出土した。Ⅳ期は2区 SK153、3区 SE428・SE429・SK599等が該当し、集落の主体が南側の3区付近に遷移することが推察される。続くⅤ期に明確に属する遺構は未確認で、Ⅵ期には1区 SK021、3区 SE426等がある。

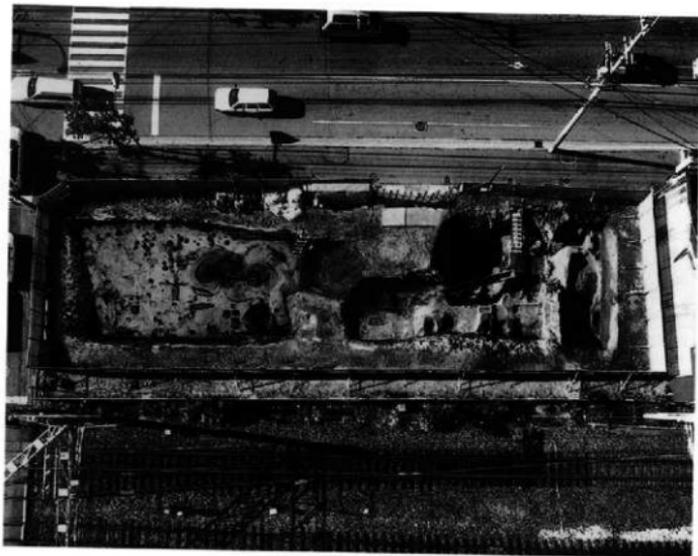
以上から、該地の集落消長の傾向としては、12世紀前半に北側(1区・2区周辺)で集落化が行なわれ、12世紀中頃に全体でそのピークを迎える。12世紀後半以降には、やや規模を縮小させながら南側(3区周辺)に主体を移し、14世紀初頭まで集落経営が継続していることが取次される。

### 注

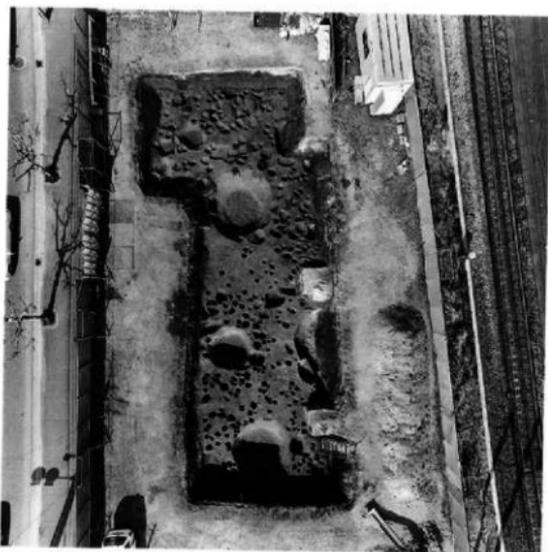
1) 山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』興隆社 1996年

山本信夫「統計上の土器一歴史時代土師器の編年研究によせて」『乙.益重隆先生古稀記念 九州上代文化論集』1990年

# 图 版



(1) 1区全景 (上空から) ※上が西, デジタル合成写真



(2) 2区全景 (上空から) ※上が北



(1) 3区全景 (上空から)

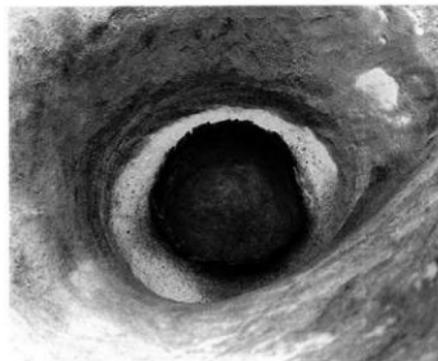
※上が北



(1) 1区 SC025 (東から)



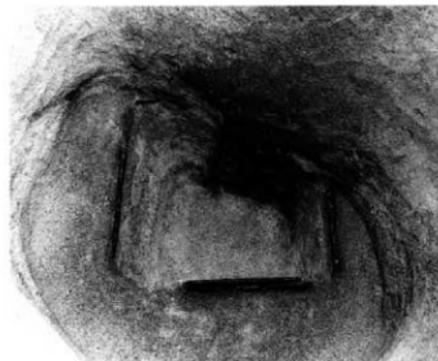
(2) 1区 SE022 (東から)



(3) 1区 SE022井筒 (東から)



(4) 1区 SE023 (西から)



(5) 1区 SE023井筒 (西から)



(6) 1区 SE024 (西から)

図版 4



(1) 1区 SK017 (南から)



(2) 1区 SK018 (東から)



(3) 1区 SK021 (東から)



(4) 1区 SX020 (南から)



(5) 1区 SX020 (西から)



(6) 1区 SX020 (西から)



(1) 2区 SC133 (北から)



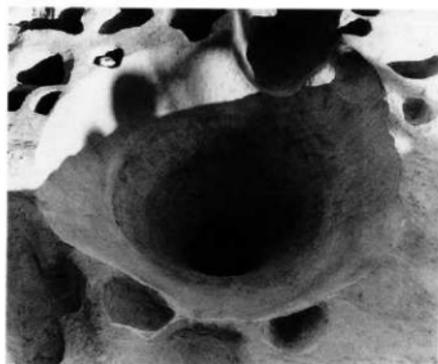
(2) 2区 SC140 (西から)



(3) 2区 SE131 (西から)



(4) 2区 SE131井筒 (北から)

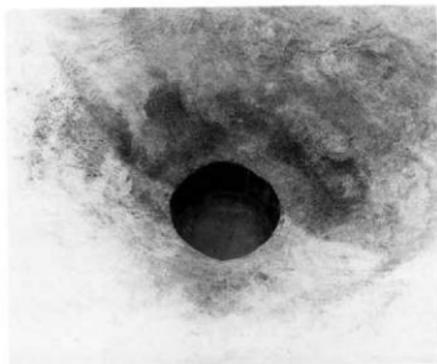


(5) 2区 SE138 (西から)



(6) 2区 SE139 (南から)

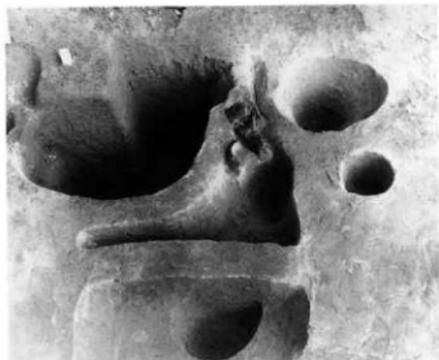
図版 6



(1) 2区 SE139井筒 (北西から)



(2) 2区 SK121 (南から)



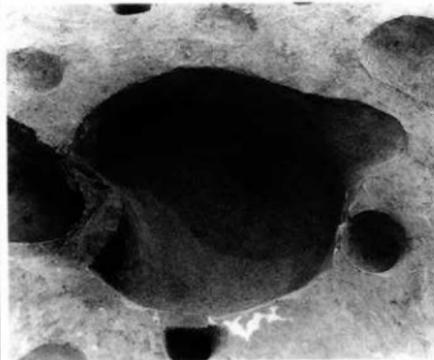
(3) 2区 SK122 (南から)



(4) 2区 SK125 (南から)



(5) 2区 SK132 (南から)



(6) 2区 SK136 (北から)



(1) 2区 SK137 (北から)



(2) 3区 SE424 (東から)



(3) 3区 SE428 (東から)



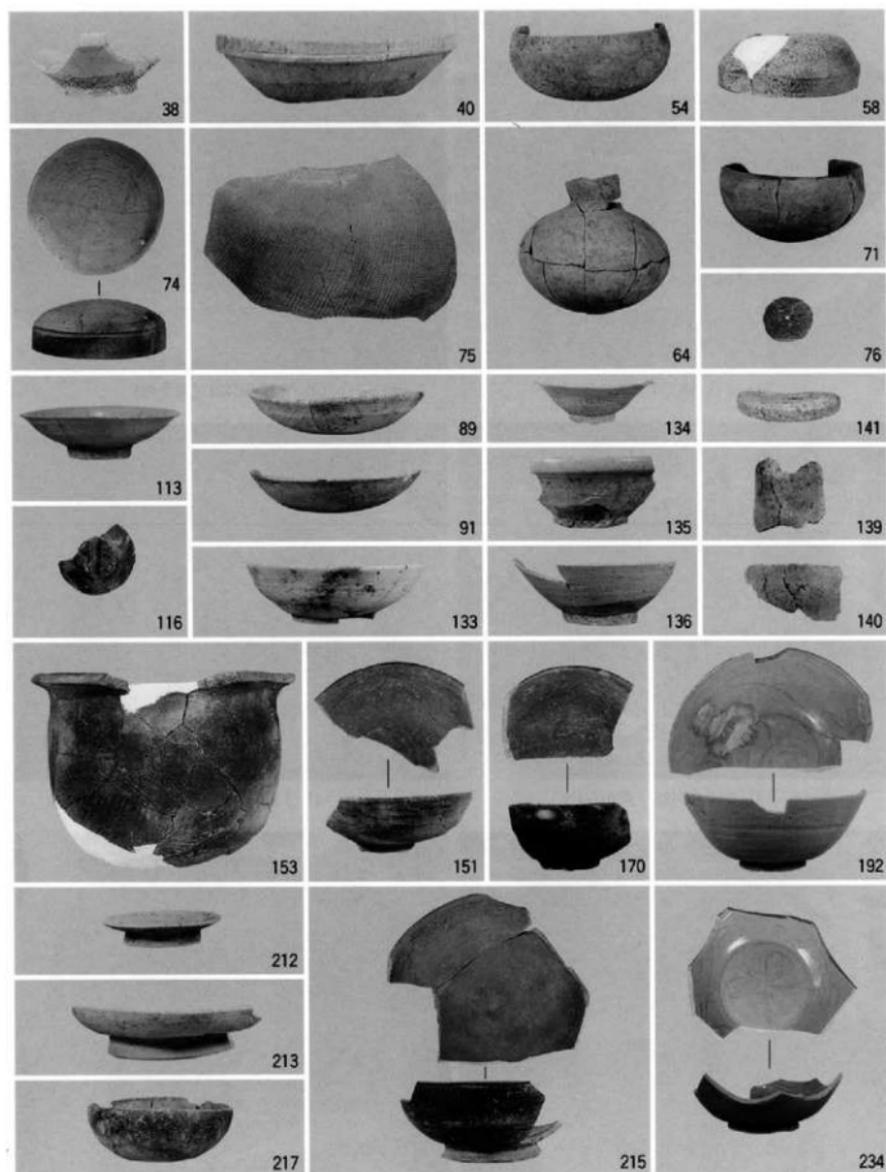
(4) 3区 SK421 (西から)



(5) 3区 SK422 (西から)



(6) 3区 SK423 (西から)



---

箱崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅰ

はこ ぎき  
箱 崎 14

—箱崎遺跡第20次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第767集

2003（平成15）年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 高松印刷  
福岡市東区松島1丁目4-10

---

# 「箱 崎 14」

福岡市埋蔵文化財調査報告書第767集

付 図

箱崎遺跡第20次調査 1区・2区・3区全体図 (1/150)

